
夢の盾 現の剣

橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の盾 現の剣

【Nコード】

N7617M

【作者名】

橙

【あらすじ】

杉原さんは、僕の目の前で「あちら」から帰ってきた 悪夢と共に。

帰還から始まる異世界譚。

普通の文化系男子が、好きな子のためにがんばるファンタジーです。

帰還

この話を聞いて杉原さんのことを大嘘つきだという人がいるかもしれない。でも、これは本当の話だ。少なくとも僕は、これが嘘じゃないと知っている。自分の目で見てきたし、誰より大いに関わってきたと思う。そうこれは、僕の戦いでもあった。

でももしかしたら、どれだけ何を言っただって、みんな信じないかもしれないな。「あの時」を見たのは、僕だけだったから。

「あの時」というのは、1つの終わりだった。そして、僕にとつての始まりでもあった。

それは、静かに始まった。

といつてもちようど昼休みだったし、教室ではみんなが弁当を広げていて、だから全然静かじゃなかった。でもそれが始まって、僕の耳には一切の音が聞こえなくなった。静かに、静かに閉ざされた。

「あの時」、僕の前に座った杉原さんがふと笑うのをやめた。サンドイッチを持つ手も止まって、杉原さんのすべてがその一瞬、世界から切り離されたように停止した。ただ淡い色の目だけが、ゆらゆら揺れていた。

その時の僕にはもちろん、一体何が起きているのかまったくわからなかった。ただ息をのんで、杉原さんの水面みたいな目を見つめていた。

静かだったけど、劇的だった。限りなく薄めた絵の具に、筆先から少しずつ濃い色を落とすと、にじんで広がるだろう。そんな感じ。ゆらゆら揺れる目に、急速に何かが吸いこまれて、濃くなっていく。瞬きのたび、杉原さんの目はすっかりした重さを取り戻していくようだった。

杉原さんの目は明るい茶色をしていて、瞳の周りが灰色がかった

いるんだ。そんなことを、その時発見した。まっげもばっちり長かった。それは前から知っていたけど。

全部吸いこんで、杉原さんは目を閉じた。僕の耳に、やっと周りの音が戻ってきた。笑い声、校内放送、誰かが廊下を走っていく音。何も変わらなくて、ただ杉原さんだけが決定的に違っていた。そしてそれを知っているのは、僕だけだった。

杉原さんは何度が瞬きをして、僕の方を見た。もう揺らいではいなくて、ずっしりとした石をのみこんだように確かな、静かな目だった。

「……おかえり」

僕はそう言った。そう言うのが、一番正しいような気がした。そして、やっぱり正解だった。杉原さんはふっと笑ったんだ。

「うん、ただいま」

そしてぽつりと一粒涙を流した。

それは始まりだったけど、終わりでもあった。
杉原さんは帰ってきた。

一 保健室

僕たちはそれから保健室へ行った。

杉原さんの涙を中西に見つかって、ちよつとうるさくなりそうだったから。

嶋本が、葉月を泣かした。

あの場面を見れば確かに、誰だってそう思ってしまうだろう。男女が向かい合って飯を食っていて、女の子が泣き出したら、9割がた男が悪い。それは間違いじゃない。中西はちよつとうるさいけど、正義感がある奴だから、杉原さんを心配したんだと思う。

もちろん本当は全然違うから、中西の責める視線に僕は慌てた。杉原さんがとつさに「違うの、ちよつと体調が悪くて」と言ったので、僕たちは教室を抜け出すことができた。中西はかなり、不審そうな目をしていただけ。

保健室の椅子に座った杉原さんは、もう落ち着いていた。給水機から水をついで渡すと、小さくありがとうと言ってくれた。

「大丈夫？」

僕が聞くと、杉原さんは微笑んで頷いた。

「嶋本……新くん？」

「うん」

確認するように呼ばれたので、ちよつと不安になった。

「僕のこと、わかる？」

「うん」

杉原さんはすぐに頷いて、そのことに自分でも驚いたように瞬いた。

「うん……私、わかる」

よかった。僕は心底ほつとした。

普通なら、今の今まで目の前にいた人のことがわからなくなるな

んで、ありえない。冗談だと思うかもしれないけど、僕は結構本気で不安だった。ついさっきの杉原さんを見てしまったから。

何が起こったのかよくわからないけれど、何かが起こったことは確かなんだ。

「あのさ……私たち、つき合ってるんだよね」

杉原さんは両手でコップを持って、上目遣いに僕を見た。

すごく可愛かったし、ほっとしていたこともあって、僕はおどけて答えた。

「うん。まさか忘れてないよね？夏休みのちよつと前からつき合ってるよ」

「……覚えてるよ」

杉原さんは目を伏せた。様子がおかしいな、とは思った。でもしつかり確認しておきたいところだったので、僕は笑って続けた。

「よかったー。あの告白の時に振り絞った勇気が、なかったことになるかと思った。7月の頭くらいだったよね、覚えてる？部活前に僕が呼び出して、それで」

「嶋本くん」

杉原さんが鋭く遮った。

その呼びかけからして、もうおかしかった。だって、彼女は僕のことを「新くん」と呼んでくれていたから。それは僕の努力の賜物だ。告白してつき合う前、ちよつといいなって思っていた時から、名前で呼んでつてお願いしてきた。仲良くなつて緊張がほぐれて、やっと呼んでくれるようになったんだ。

杉原さんのことを名前で呼びたいってお願いは却下されたけど、僕の名前は呼んでくれていた。

杉原さんは顔を上げた。きっぱりと強い目をしていて、僕は悪い予感しかしなかった。

「ごめんなさい。こんなこと、いきなりかもしれないけど……」

僕は杉原さんの桜色の、可愛い唇を見つめていた。そこから出る

次の言葉を予想して、なぜだかぼんやりとしていた。

「別れよう、私たち」

予想通り。それでも、僕は冷たい水をぶっかけられたみたいに、身体が冷えてずんと沈んだ。茫然としてしまいうくらいショックだった。

いきなり、確かにいきなりだ。僕たちはまさに今まで、問題なくつき合っていたはずだ。昼飯と一緒に食べて、部活終わったら一緒に帰って。夏休みには夏期講習の合間をぬって、映画に行ったり花火に行ったりしたぞ。別れる要因なんて、僕には見当たらない。

「……理由、聞いてもいいかな」

別れるなんて絶対嫌だ。そう喚く心を押し殺して、僕は尋ねた。

杉原さんの顔が、悲しげに歪んだ。泣き出しそうに見えて、僕ははつと胸をつかれた。

けど、杉原さんは泣かなかった。膝上においた手をぎゅっと握って、一度大きく深呼吸をする。そうして、僕をしつかりと見た。

「嶋本くんには、全部話す。そうしなきゃ駄目だと思う。でも、信じるか信じないかは、嶋本くんが決めていいよ」

「うん」

僕はちらりと目を上げて時計を見た。昼休みはあと15分くらい。もし長くかかるなら、5限をサボってもいいや。覚悟を決めて、僕はパイプ椅子に座って杉原さんに向き合った。

「ありがとう、嶋本くん。私ね」

杉原さんが話し始める。僕はちよつと手をあげて、それを遮った。話を聞く前に、一つだけ言わなきゃいけないことがあった。

「あのさ、名前、新でいいよ。新って呼んでよ」

「うん」

杉原さんは笑った。もう少しで泣き顔に変わりそうな微笑みだった。

二 帰り道

日が落ちるのが早くなった、と思う。

季節は確実に秋へ向かっていて、昼の日差しはきついけど、それがなくなってしまうえば風はひんやりと腕を撫でた。寂しい虫の鳴き声に覆われた夕暮れ、夜はもうすぐそこだった。

合唱部では迫りくる学校祭でのミニコンサートに向けて、目下鋭意練習中だ。当然、今日も追い込みの練習だった。僕の歌う曲目は、去年流行ったポップス2曲と、クラシックの重唱を2曲。半分以上エミたいなコンサートで、前売りチケットご購入のお客さんには1ドリンクサービスあります。

そうだ、杉原さんに渡そうと思って、チケットを1枚買っておいたんだ。

ぼんやりそんなことを考えていたら、後ろからいきなり衝撃がきた。

「聞いたぞ新。お前、あの彼女泣かしたんだってなあ」

振り返ると、にやついた和志がいた。とつさに反応できずにいたら、薄っぺらい鞆でまた背中を叩かれた。

青いフレームの眼鏡の奥、ぎよろつとしたつり目がおもしろそうに細められている。それを見た途端、僕は何もかも面倒臭くなってやり返すことをやめた。和志の見せる、あけすけな好奇心にうんざりした。

「……泣かしてねーよ」

僕は投げやりに答えた。和志はそのまま、僕の隣に並んだ。

「彼女、早退したんだろ？何かあったんだろ？」

杉原さんは、結局5限には出ずに帰っていった。

心配だったけど、僕は5限の生物も半分出て、さっきまでちゃん

と部活にも行った。混乱しているという理由では、高校生は休めない。歌に全然身が入ってないって、部長の赤川さんには怒られたけど。

杉原さんの話してくれたことが頭の中でぐちゃぐちゃに散らばって、僕は途方にくれていた。正直、これ以上何も考えたくない。

「なあ、ケンカでもしたのか？お前らもうダメになったの？」

和志は直球で聞いてきた。僕はもうそれで限界だった。

「黙れ。しゃべんな。蹴るぞ」

睨みつけると、和志は驚いたように目を瞠って足を止めた。僕はもちろん、一緒に立ち止まったりしなかった。むしろ足を早めて、和志を置き去りにしてやった。

「えーっ、マジで別れたの!？」

和志の無神経な大声が追いかけてきた。うるさい、最悪だ。僕は心の中で大いに悪態をついてやったけど、やっぱり足は止めなかったし、振り返りもしなかった。

「私は今日まで、ここにいなかったの」

杉原さんはそう言った。

「頭がおかしいって思われるかもしれないけど……ここじゃない、別の世界にいたんだ」

杉原さんは真剣な表情で、本気で言っているのだとよくわかった。だからこそ、僕は慎重に指摘せざるを得なかった。

「……杉原さんは、今までちゃんと学校に来てたよ？」

「うん」

杉原さんは小さく頷いて、胸に手を当てた。

「私が全部、向こうに行ったんじゃないと思う。心　精神が、行つたんじゃないかな。生身の身体は渡れないって、聞いたから」

「向こう」とはどこなのか、誰にそう聞いたのか、杉原さんは言わなかった。目を伏せて、ぼつりぼつりと、1つずつ語り始めた。

ここじゃない別の世界。突風に吹き飛ばされて、杉原さんはそこへ行った。

「そうとしか考えられない。すごい風で、思わず頭を庇ってしゃがみこんだの。それが止んで目を開けたら、もう、ここじゃなかった」
その世界では、杉原さんは特別な扱いを受けたのだという。身体をもたない者として。その世界では杉原さんの身体はちょっと透けていて、思い通りに自由に姿を変えることができた。鳥に獣に、自分ではない人に。そして、その世界で唯一「悪夢」に対抗することができた。

「悪夢」について、杉原さんはたくさん説明してくれた。でも、僕にはそれがなんなのか、全然わからなかった。ただ「悪夢」とは僕の知るような悪夢ではなくて、杉原さんの敵で、その世界では幽霊のような、伝染病のようなものだったらしい。

「『悪夢』は人の心を支配して、身体を操るの。心だけだった私は、むしろ『悪夢』の影響を受けなかった。身体の入れ物がなければ、『悪夢』は入り込めないから」

そして、「悪夢」に取り憑かれた人々を、正気づかせることができた。

「やり方はね、『悪夢』と同じなんだ。人に 身体の入れ物に入り込んで、心に直接働きかける。私の場合は、目覚めさせる」

身体をもたない杉原さんだからできる、特別な役割。自覚してそれをするようになってから、少しずつ力をつけた。そのうち「悪夢」の側からも警戒されるようになって、攻撃を受けるようになった。

「悪夢」の攻撃は、その名の通り精神攻撃なのだそうだ。でも、それから守って、支えてくれる人達もいた。

「……でもね、ちよつと無理しすぎて、ダメになっちゃった。疲れて動けなくなつた時、帰れって言ってくれた人がいて。だから、ここに戻ってきたの」

僕は 何も言えなかった。

杉原さんの語る世界は到底信じられるものではない。そしてあっさり嘘だと笑うには、あまりに大真面目だった。杉原さんは僕の反応をいちいちうかがうこともなく、白い床を見つめてただ淡々と話した。そのせいで、僕は何をどう返せばいいのか、ますますわからなくなった。

心だけ、異世界へ飛び出した杉原さん。じゃあ、ここにいた杉原さんは、何だったって言うんだ？

足下がガラガラ崩れていくような気がした。

杉原さんの心は、今までずっとここにいなかった？

「……いつから？」

いつから、そこにいたの？

僕はやっとそれだけ口に出した。口の中がひどく乾いていて、それなのに手はじっとり湿っていた。

杉原さんは少し首を傾げたけど、僕の問いかけがわかったようだった。一度唇をかで、ゆっくり答えた。

「……4月。2年生になった、始業式の日から」

それで終わりだった。もうおしまいだと、突きつけられたような気がした。

足下が崩れて、まっさかさまに落ちていく。その浮遊感にも似た真っ暗な思いを、僕は初めて味わった。

あれが、失恋というものなんだろうか。

三 嘘

混乱しきつて鬱鬱とした気分のまま、僕はやっと家に帰ってきた。いつもより重く感じる扉を開けると、テレビのバカ笑いが玄関にまで響いてきた。こちらの気分などお構いなしのその大音量が、ひどく癪に障った。沙也の奴が、また消し忘れたんだ。

リビングのテーブルの上には、開いて伏せたマンガと、お茶の入ったコップが出しっぱなしになっていた。だらしない妹だ。沙也はちよつと頭がいいけど、こういうところは本当にダメだ。

イライラしながら、テレビを消してコップを流しにおく。鉛みたいな重さのため息が出た。どうして僕がやらなきゃいけないんだ。今、とても物に八つ当たりしたい。このマンガを壁に叩きつけてやりたい。

そんなことを半分本気で思いながら、沙也のマンガを手にとった。ピンク色の表紙には、バンダナを巻いた目の大きな女の子が、妖精みたいな生き物を肩に乗せて笑っていた。見たことのないようなその服装に、僕はまさかと思って表紙をめくった。

あらすじをなぞると思った通り、それは異世界へ冒険の旅に出た女の子の物語だった。

7つの海を旅して、伝説の秘宝を探す。不思議な石の力で妖精を仲間にする。わけあって海賊になった王子様と、恋に落ちる。甘く危険な旅の物語に、僕は興味なんかない。でも、その続きが知りたいと思った。

異世界へ行った女の子は、帰ってきてどうなった？

「なにしてるの？そんな、制服着たまんまで」
すぐそばで沙也の声がして、僕はぎょつとした。ジャージ姿の沙也が、テーブルに手について、僕の顔を覗き込んでいた。首を傾げ

て、訝しげに眉をひそめている。

「あ、いや……別に」

近づかれたことに、全然気付かなかった。どぎまぎして、僕は即座にマンガを沙也に返した。いつの間にか、食い入るようにマンガにのめり込んでいたらしい。

「そんな真剣になるくらい面白かった？何なら貸そうか。あつくんって、そういうの好きだったっけ」

「いや、いいよ」

手を振って断ると、沙也は片眉を上げてふうん、と呟いた。そのまま興味が失せたように、くると背中を向けて部屋へ戻っていく。

ふと、言葉が口について出た。

「なあ、女の子って、どのくらいの確率で異世界へ行くもんなの？」

「はあ？」

語尾をはね上げて、沙也が振り向いた。

沙也は驚きすぎて笑うのを失敗したような、微妙な顔をしていた。何も言われなかったけど、沙也の言いたいことがわかる気がした。

僕だって、寝言だと思っだろう。

「いや……なんでもない」

沙也の顔を見ないようにしながら、早足で自分の部屋に向かった。もの問いたげな沙也の視線が追ってくるのがわかった。

自分の部屋がこの世で一番安全な場所のように思えた。だって僕以外誰もいない。スイッチを切るように、そのままベッドの上へ倒れ込んだ。

頭がガンガン痛む。閉じた瞼の裏で、いろんなイメージがらせんを描いて浮かんでは消えた。保健室の杉原さん、落ちていく僕。揺らぐ水面のような杉原さんの目。

告白した日の真っ赤な顔。初めて一緒に帰ったときの揺れる手。
あと、花火大会の夜の。

「……心がいなかったなんて、嘘だろ」

目を開けて、泡みたいないな幻を追い払った。

全部嘘、なのかもしれない。それが一番説明のつく答えだ、残念ながら。

つまり別の世界の話は真っ赤な嘘で、杉原さんは僕と別れたいがためにすべてをでっち上げた。その場合、あの涙も真剣な表情も、芝居だったことになる。

一番おかしいところのない、救いようのない痛い答えだ。

でもまだ、こっちの方がましだった。

「嘘だよな……」

呟きは思った以上に情けなく、頼み込むような響きになった。

一番痛いのは、話が本当だった場合の方だ。

未だに全く信じられないけど、異世界の話がもし本当だったら。

僕は僕の心を、否定されたも同然だった。そうだろう？僕は心が不在の杉原さんを好きになって、告白して、一緒にいて喜んだりして。馬鹿みたいだ、いや本当の馬鹿だ。

もし杉原さんの話が本当なら、僕の心が嘘だったってことになる。好きだと思ったこともドキドキしたことも笑顔が嬉しかったことも、全部嘘。だってその対象の杉原さんは、本物の杉原さんじゃなかったんだから。そこに心はなかったんだから。

だから認められなかった。

どっちに転んでも最悪だった。嘘なのか本当なのか、もう関係ない。一番逃げたい事実が覆らない。

僕はふられたんだ。

四 杉原さんの心

最悪な気分というのは、一晚寝たくらいじゃ浮上しなかった。

それでも飯は食うし、学校にも行く。授業を聞いて、友達と話す。習慣って強いな、と思った。たぶんいつも通りにできたはずだ。

いつもと違うのは、何をしても他人事にしか感じないことだった。薄い膜ごしに、普段の生活というものを眺めているみたいだった。

杉原さんの方は完璧にいつも通りに見えた。真面目に授業を受ける横顔も、友達と楽しそうに話している笑顔も。

僕に対してさえ、彼女は変わらなかった。朝一番に昇降口で、「おはよう」と声をかけてきてくれたのだ。不意をつかれて僕が何も返せないうちに、杉原さんは歩いていってしまっただけ。

その後も、杉原さんは僕を変に避けたり、気まづく目をそらしたりしなかった。目が合わせられなかったのは僕の方だ。杉原さんのことが、全然わからなかった。

そんないつも通りでも、僕と杉原さんが別れたというウワサは流れたようだった。一日でどうして話が広まるのか、ソースは誰なのかは知らない。僕は友達の何人かから、「お前別れたって本当か？」と聞かれただけだ。その度に、曖昧に返しておいた。

もしかしたら、昼と一緒に食べなかったことが、ウワサに拍車をかけたのかもしれない。つき合ってから、大抵昼は一緒にいたから。逃げたのはもちろん僕の方だ。3限が終わった後に早弁して、昼休みは自由参加の合唱部の昼練に、久しぶりに出た。昼練は和志の、同情を含んだ眼差しが本気で鬱陶しかった。

いつも通りの振る舞いができたのは6限までだった。部活では2日連続で、赤川さんに怒られた。

赤川さんはとても鋭い。歌っている時にぼんやりしていたり、他

のことを考えていたりすると、すぐにバレる。彼女はふつくら丸い顔をしてるけど、睨む目が厳しくて迫力があるんだ。

「嶋本くん、集中してないようね」

赤川さんの地声は少し高い。歌う時はのびやかなアルトだけど、普段、特に僕みたいなのに怒る時は、硬質な冷たい声になる。僕は項垂れて、精一杯小さくなった。

「……ごめん」

「パーリーの自覚ないの？もし調子が悪いなら、帰った方がいいんじゃない？」

確かに今日は帰った方が、僕と赤川さん双方のためになると思った。パーリーとしてあるまじき考えかもしれないけど、僕としてももう無理だった。

「そうする」

僕はあつさりと合唱台から降りた。

あつけにとられたような赤川さんを横目に、荷物を持って第二音楽室を出る。扉を閉めた途端、中で皆が騒然となるのがわかった。

「赤川、お前な、あいつの気持ちも酌んでやれよ」

和志の非難するような声が聞こえた。あいつ、変な友情にかられて、余計なことしゃべらないといいけど。

日の当たらない、ひんやりした階段を下りていく。一段一段、沈み込んでいくようだった。部活もいい加減にしまってくる、僕は最低でぐちゃぐちゃだった。

校門の前で会えたのは偶然で、奇跡みたいなものだった。誓って見計らったりなんかしていない。

下駄箱のところでは全然気づかなかった。校門を出る直前、ふと顔を上げた時にわかったんだ。すぐ前を歩いているのは杉原さんだった。

ぼかんとする僕を、杉原さんが不意に振り返った。一拍遅れて、

彼女も目を丸くする。そしてふつと笑った。

「早いね。部活終わった？」

僕は曖昧に頷いた。なぜか久しぶりに杉原さんの顔を見た感じがして、目が離せなかった。

自然な流れで、僕たちは並んで歩き出した。今日一緒に帰るなんて思ってもみなかったことなのに、お互いが隣にいることに全然違和感がなかった。歩くスピードも無理なく合わせられる。あまりにも、いつもの帰り道だった。

「なんかね、図書室ではとしちゃった。私自習してるんじゃないかって、待ってるんだ、って思ってた。バカだね」

杉原さんはくしゃつと、苦笑気味に笑った。待った相手は僕だと、ちゃんとわかった。

そうだ。僕の部活が終わるまで、杉原さんはいつも大抵図書室にいた。杉原さんは帰宅部だから、僕に合わせてくれていたんだ。嫌な顔もせずに。

じんとしたけど、同時に、もう僕を待つてくれることはないんだとわかってしまった。

だって今は、部活が終わる正規の時間よりずっと早い。もう待たなくていいんだと気づいて、杉原さんは図書室を出てきたんだろう。シヨックが顔に出たんだろうか。杉原さんが心配そうな表情で僕を覗き込んだ。

「新くん、目の下にクマができてる。体調悪い？なんか、疲れてるっていうか」

言いかけて、杉原さんは目を伏せた。

「っていうか、私のせいだよ」

「いや、僕は別に体調崩したとかじゃないから、心配しないで。杉原さんこそ顔色悪いけど、平気？」

僕は慌てて言った。単なる寝不足だ。まあ、原因は杉原さんだけ。でも心配かけたくないし、変に自分を責めてほしくなかった。

そして、言ってから改めて気づいた。杉原さんの顔色が悪い。

「本当に、大丈夫？」

逆に心配になって問いかけた。杉原さんはいつも通りだと思っていたから、見落としていたんだ。明らかに彼女の顔には血の気がなかった。寝不足のクマどころの話じゃない。

それでも、杉原さんは微笑んだ。

「ありがとう。でも大丈夫。ちよつと、眠れなかったただけだから」
やんわりと拒まれた。そんな気がした。僕はもう無関係なのだと。

それから、これまでの帰り道と同じように、駅のホームで僕たちは別れた。向かう方向が反対なんだ。

音楽と共に閉まった扉の向こう、手を振る杉原さんを見送った。
人混みに紛れる彼女も、彼女を乗せた電車もゆっくりと動き出して、すぐに見えなくなった。

杉原さんはやっぱり、無理して笑っていた。僕にはどうしてもそう思えた。どうして眠れなかったんだろう。どうして、がんばって笑顔をつくったんだろう。

僕は初めて、杉原さんの気持ちのことを考えた。

僕の気持ちだけで手一杯なのは、今も変わらない。けど、彼女の方は「別れよう」と言った時、何を思っていたんだろう。そして今、どんな思いでいるのだろう。

青白い杉原さんの顔を見て、僕はやっと彼女の心に目が向いた。
それを知らなきゃダメだと思った。

五 特別教室棟

杉原さんは皆と距離を置いている。僕が出した結論はそれだった。

杉原さんの心が知りたいと思って、昨日一日かけて彼女を観察したのだ。自分でも、気持ち悪い奴だなと思うよ。こっそり杉原さんを目で追って、ふとした表情も見逃さないように気を配って。

でももう、誰に何を言われてもいいや。そんな気分だった。僕は僕なりのけりのつけかたを探すって、決めたんだ。

杉原さんは少し、独りでいることが多くなっていた。ほとんど違和感を覚えないくらい、僅かな変化だ。たぶん、おかしいと思うのは僕くらいだろう。一昨日の「あの時」以前と今の杉原さんを比較できるのは、僕しかないから。

例えば、杉原さん自身から友達に話しかけに行くことがなかった。休み時間は誰とも話さず、1人で本を読んでいた。選択授業の教室移動も、ゆっくり準備をして友達とはタイミングをずらして、1人で行ったようだ。何気ないことだけど、妙に気になった。

極めつけは、昼休みだ。僕が昼練へ行くより早く、杉原さんは教室を出て行った。弁当も食べずに。

さすがにダメだと思って、後をつけることはしなかった。でも気になるから、昼練に行くのはやめて、ずっと教室にいた。ちょっとした用事なら、すぐに戻ってくるだろうと思って。

でも杉原さんは、5限が始まる直前まで戻ってこなかった。どこへ行っていたんだろう。昼、ちゃんと食べたんだろうか。

杉原さんはちょっと疲れているように見えるけど、それ以外はいつも通りだ。話しかけられれば笑って返す。授業で当てられたらきはき答える。

でも、何というか　透明になってしまったみたいだった。存在を薄めて、杉原さんは遠くへ行ってしまった。誰も、気づいていないけど。

僕は決心した。こうなったら、もう他に方法はない。杉原さんから、直接話を聞くんだ。

ちゃんと、本当のことを言ってほしいと伝えよう。異世界なんかの話じゃなくて、本当は何を考えているのかを。杉原さんは、絶対に何か悩んでいる。

決意とともに学校へ来て、僕は朝からチャンスを探した。授業中もじりじりしながら過ごして、ついに昼休みになった。

昨日と同じように、杉原さんは教室を出て行く。僕は迷わず席を立った。

「あ、嶋本くん」

彼女に続いて教室を出ようという時に、呼び止められた。委員長の北沢だ。ちょうど同じタイミングで教室を出ようとして、鉢合わせしてしまった。

北沢は眼鏡を押し上げて、しっかり者らしいはきはきした口調で言った。

「ちょうどよかった。嶋本くん合唱部だね？あのだ、音楽の宗田先生に」

「ごめん北沢、後でもいいかな」

目で杉原さんを追いながら、僕はうわの空で言った。杉原さんは、廊下をまっすぐ進んでいく。

北沢は僕の視線の先に気付いたようだった。

「……葉月と何かあった？」

首を傾げ、眉を寄せて北沢は言った。ため息を含んだ心配そうな

声だった。

「なんだかあの子、元気ないよね」

「うん」

僕は頷いた。

短く応じたただけだけど、内心ではちよつと感動に震えていた。

僕だけじゃない。気付いている人は、ちゃんといるんだ。

それはとても勇気づけられることだった。杉原さんが皆から遠ざかろうとしていること、僕以外にもわかっていている人がいる。僕一人ではないということが、こんなにも心強く、嬉しいことだなんて。「心配だから、ちよつと一緒に話そうと思って」

杉原さんは廊下の突き当たりを左に曲がっていった。あの先は渡り廊下で、特別教室棟に繋がっている。

「ごめん、行くわ」

「……うん」

気がかりそうな顔をした北沢に軽く手を振って、僕は走った。

すぐ追いつけるはずだった。杉原さんの歩調は決して速くなかったし、特別教室棟までは何もない、ただの廊下だ。昼休みだから人は多いけど、見失う要素なんてなかった。

でも、廊下を曲がってもそこに杉原さんの姿はなかった。

教室の方はがやがやと賑やかだったのに、渡り廊下の先の薄暗い別棟はしんとしている。授業中でもないこの時間、ここに用がある奴なんて普通はいない。授業後には金管バンドの練習場になっている棟だけど、昼の練習は禁止されているらしい。トランペットどころか、物音一つしなかった。

南向きの窓がない特別教室棟はひんやりした空気に沈んでいて、少しの音でもよく響いた。化学実験室や生物準備室、物置になっている教室、どの扉もぴったり閉じられている。杉原さんはどこにいるんだろうか。

風潰しに一つずつ入って確かめようか考えていた僕の耳に、かな音が聞こえた。

話し声のようにも聞こえて、僕はどきりとした。息を殺して、耳をそばだてる。

けれどそれきり、音は聞こえてこなかった。

もうヤケクソだ。僕は1番近い教室の扉を、勢いよく開けた。鍵はかかっていなかった。

「杉原さん？」

耳が痛くなる静けさに負けないよう、僕はわざと大きな声を出した。

そこは、美術の準備室のようだった。選択で美術を取っていない僕には、初めて入る教室だ。つんと、ほこりの淀んだにおいが鼻をつく。普通教室の半分くらいの広さで、絵を乾かす棚や石膏の入ったケースが並べてあって、ずいぶん狭く見えた。

ゆっくり見回してみても、探している人の姿はなかった。

「いないか……」

呟きながら、僕は念のため中へ入った。気配はなかったけど、この教室には死角になりそうなところが多かったから。奥まで入って確かめようと思った。

そして、それに会った。

六 邂逅

視界の隅で何かが揺れたような気がして、僕ははっと振り向いた。
「杉原さん？」

彼女がうずくまっているのかと焦ったけど、そこには誰もいなかった。

画板の積まれた戸棚があるだけだ。安心したような落胆したような気持ちになって、僕は息をはいた。思ったよりも深いため息になった。

ここには、やっぱりいないみたいだ。僕はうつむいて、のろのろ入口の方に振り返った。他の教室を探そう。

そして、ぺたんと、その場に座り込んだ。

驚きのあまり足から力が抜けるなんて、初めてのことだった。

『お前、あの女のおいがする』

半分透けた魚が、目の前に 宙に浮かんでいた。

ぽかんと口を開けて見上げる僕の前で、魚はゆらゆらと尾ひれを揺らめかせた。泥水に浮かぶ油のようなぬめる光沢を放って、長いひれは一瞬ごとに色を変える。

『我が見えるのか。加護があるということか』

魚から目が離せないまま、僕は思わず耳を塞いだ。ひどい声だ。頭の中までキンキン響いて、脳みそに針のように刺し込む声だった。
『だが騎士ではないな。お前は何だ』

魚はぱつくりと口を開けた。とがった歯の奥に、真っ赤な舌がしまいこまれているのが見える。背筋が粟立った。

こいつは魚じゃない 僕はやっとそう思い至った。魚に似た、

薄気味悪い、もっと別の何かだ。

お前こそ何だと聞きたかった。でも、喉が引き攣って息をするのがやっとだった。

『加護があるとは口惜しい』

魚はせせら笑った。確かに笑った。

『あの女以外で、我を見た者は初めてだというのに』

「……杉原さんの」

喉の奥から、恐怖を押しつけて声が飛び出た。思わず、耳に当たった手が外れる。

魚は、杉原さんの話をしている。僕はそう確信した。

それなら、僕はこれの正体を知っている。

「『悪夢』?」

『ああやはり、わかるのだな』

魚はすい、と僕に近づいた。宙を泳ぐのに合わせて、周りの空気がさざ波のように震えた。

「そんな……」

自分の目が信じられない。

保健室での、うつむいた杉原さんの姿が頭に浮かんだ。

あの時、話してくれたこと。全部嘘だと思っていたのに。目の前の存在が、全てを覆す。眩暈がした。

『お前は、何だ?』

魚は再び問いかけた。ゆっくりと、値踏みするように僕の周りを回る。

僕は答えられなかった。頭が真っ白だったのだ。目に映るものを信じたくなくて、思考はとっくに凍結していた。

『あの女に加護を受けるほど、近い人間なのか』

固まる僕に構わず、魚は続けた。くるくると回るその尾ひれに、僕は取り囲まれた。視界が淀んだ虹色に覆われる。

逃げられない　僕は息をのんだ。

『お前は足がかりだ』

正面で、魚はぴたりと止まった。瞼のない、間の離れたその目に見すえられる。揺らめく極彩色を背に、魚の姿が大きく膨らんだかのように見えた。

『あの女の、悪夢の始まりだ』

魚はくわつと大きく口を開けた。その鋭い歯列に、僕はとっさに腕で顔をかばった。　食われる！

けれど、とがった牙が腕に食い込むことも、頭がひとのみされることもなかった。恐る恐る目を開けた時、そこには何もなかった。

ただの、狭い空き教室だ。しんと静まり返り、乾いた絵の具と黴のにおいしかない。あの魚の化け物はどこにもいない。

夢から覚めたような気分で、僕は立ち上がった。ぼんやり、周りを見回す。

何が起こったのだろう。たった今まで目にしていたことがひどく遠く、現実感なく感じられた。幻だったのか？夢でも見ていたのだろうか？

深く息をはいて、両手で顔を覆った。背中が冷たい。ひどく汗をかいているのだと、初めて気付いた。そのくせ、心臓は早鐘を打っている。……それが、夢ではないことの証拠だった。

あの「悪夢」は、ここにいた。現実だ。

しばらく、動けなかった。ひどい立ちくらみを起こしたみたいに、目がチカチカした。

杉原さんはどこだろう。僕がやっとそれを思い出した時、昼休み

を終わらせる予鈴が鳴った。特別教室棟の廊下に、わんわんと反響を残して響く。

それに追い出されるように、僕は教室へ戻った。

杉原さんは既に教室にいた。カバンから教科書を取り出している様子に、おかしいところはない。僕はほっとした。

よろよると席についた時、前に座った吉岡が「なあ今日、この列当たると思う？」と振り向いた。

けれど振り向いてすぐ、吉岡は笑いを引っ込めた。

「嶋本、顔が真っ青だぞ！どうした？」

「大丈夫。ちょっと、頭が痛いだけ」

あまり突っ込まれたくなくて、僕はすばやく答えた。嘘はついていない。

なんだか、頭が重かった。

七 「悪夢」

頭痛は治まらなかった。むしろひどくなる一方だった。

よっぱどひどい顔色をしていたんだろうか。帰宅した後、沙也にもぎよつとされた。

「なにその顔色！……お腹でも痛いのか？」

心配はありがたいけど、的外れだ。僕はキリキリ刺し込むように痛むこめかみを押さえて、ゆっくり首を振った。

「なんでもないよ」

ソファにカバンを投げ出して、ため息と一緒に答える。体のだるさが誤魔化せなくて、そのままどかりと座りこんだ。ずぶずぶ、体が沈みこんでいく。

沙也はふうんと呟くと、はいこれ、と一冊の本を差し出した。前に、僕が見た少女漫画の第1巻だ。

意味がわからなくて、眉を寄せて沙也を見上げた。この漫画が、どうしたんだ？

沙也の方も、受け取らない僕に不思議そうに首を傾げる。

「あつくん、読みたいんでしょ？」

何言ってるんだ。だるい腕を持ち上げて、僕はひらひら手を振った。

「いらないよ」

「この間言ってたじゃんか。女の子が、異世界に行くとかどうとか心当たりがあつたので、僕はぐつと詰まった。

杉原さんに「別れよう」と言われた日だ。あの日僕は、ちょっとおかしくなっていたと思う。確かこいつに、「女の子はどのくらいの確率で異世界に行くのか」とか何とか口走ったんだ。

そうだ、あの日、杉原さんは「帰って来た」。

「まあソレ、おもしろいからさ。読んでみなよ」

沙也は僕の手に、漫画本を押しつけた。思わず受け取ってしまった。僕はその表紙を見つめた。相変わらず、顔の半分を占めるくらい目の大きい女の子だ。線の細い茶色の髪が、ふんわりなびいている。

「……異世界トリップってさあ、やっぱり夢だよな、女の子の」

その言葉に、僕は顔を上げた。頭の後ろで手を組んで、沙也はおどけてにっと笑う。

「夢？」

「うん。だって異世界の冒険だよ、ロマンスだよ。1回やってみたよねー」

沙也は照れくさを誤魔化すように、肩をすくめた。

「ま、できるなら、だけど」

異世界へ旅するのは、女の子の夢なのか。そのことが、僕には軽く衝撃だった。女の子なら皆、憧れるものなんだろうか。非日常への冒険。ここじゃない、どこかへ行くこと。そこで生きること。

杉原さんも、それを夢見ていたのかな。

いつの間にか僕は、異世界のことを現実的に考えていた。嘘とか、夢の中のことはなくて、現実にあることとして。

杉原さんは、本当に行ったんだ。そして帰って来た。僕はもう、今ではそう信じ切っている自分に気付いた。

昼休みに遭遇した、「悪夢」のせいだ。もう僕は、自分の目で「異世界」を見てしまったのだ。

疑いの余地はなかった。

「悪夢」に再び会ったのは、すぐのことだった。そいつはその夜、僕の目の前に現れた。

『悪夢とは夜来るものだ。そうだろう？』

眠る直前だったから、僕の部屋は電気を全て消して真っ暗だった。「悪夢」の姿は半分闇に溶けて、目ばかりがてらてらと光っている。僕はベッドの縁に腰掛けて、静かに「悪夢」を出迎えた。なぜだか、昼間のように驚いて腰を抜かしたりはしなかった。どこかで、そいつがやって来ることを予感していたのかもしれない。ただ単に、眠くて頭が働かないせいもあったけど。

『夜こそ我の領分だ。闇とともに悲劇を運ぶ』

やはり、耳に障るざらざらした声だった。僕は片膝を抱えるような格好で、魚の形をした「悪夢」をぼんやり見つめた。

これが、異世界の証明だ。

「……どっか行ってくれ」

僕には小さな声しか出せなかった。薄い壁を隔てた向こうの部屋では、沙也が眠っている。

『お前には道ができた。今我がここから去ろうと、それは変わらない』

カーテンの隙間からかすかに入る街灯の明かりに、魚の歯がちらりと光った。

『お前は、足がかりになるのだ』

「杉原さんに、何をするつもりなんだ」

僕は精一杯、「悪夢」を睨みつけた。膝を抱く腕に力が入る。こいつと1人で向かい合っていることに、今になってひどく不安を感じた。

『今こそ、復讐を』

虹色の尾ひれが、夢見るように揺れた。そのまま音もなく、魚はするりと僕を取り巻いた。ちょうど、昼間と同じように。

『そのために、まずはお前に悪い夢を一つ』

「悪夢」と目が合う。息が詰まる。

『あの女は、お前を愛していない。あの女が唯一愛する者は、ここ』

にはいない 「あちら」の騎士だ。」

戦慄を覚え、僕は目を瞠った。背筋が凍りついた。

魚は全てを見透かしているかのように、嘲るような薄い笑みを浮かべている。不協和音のような声が、頭に突き刺さる。

『あの女の心は向こうへ渡り、本当の恋に落ちた』

階段を踏み外したみたいに、心臓が一つ大きく跳ねた。

異世界の冒険だよ、ロマンスだよ。

沙也の言葉がよみがえる。そうだ、異世界に行った女の子は、冒険をして、恋をする。漫画のあらすじは、確かにそうだった。

……杉原さんも？

聞きたくないと思うのに、僕にはどうすることもできなかった。

指先さえ、自由に動かすことができない。目も耳も、この瞬間、全て「悪夢」に捕らえられていた。

『お前と、この世界で、恋人になったのは、ただの抜け殻だよ』

八 侵食

暗さに慣れた目には、闇に泳ぐ魚の影がはつきり見えた。忌々しいのに、ゆったり揺れる尾ひれはいっそ幻想的と言つてよかつた。寝そべって、大きな水槽を見上げているようだ。

『あの女は、この世界でお前と恋人になる一方で、「あちら」の騎士と愛し合っていた。女の心は騎士のものだ』

魚の話は、昨日もその前もずっと同じだった。けれど僕は、それに慣れることがなかった。聞くたびに、同じところをえぐられる。飽きもせず、突き落とされる。

『お前は最初から愛されてなどいない。あの女に、弄ばれたのだ。許せるのか?』

耳を塞ぐ氣力もなかった。でも、せせら笑う魚を見ていたくなくて、僕は顔を腕で覆った。視界が真つ暗に閉ざされる。

けれど、声が頭を掻きまわすのを、防ぐことはできなかった。

『裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。裏切りだ。』

「消えろよ……」

僕の弦きは、魚に比べればとても弱々しかった。

怒って叫ぶことも、魚めがけて枕を投げつけることも、既にやった。でも何をしようと、「悪夢」を追い払うことはできなかった。頭がおかしくなりそうだ。

いや、もうおかしくなっているのか？

『許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。』

狂ったように魚は繰り返す。

どれほど固く目をつぶっても、目をそらすことはできなかった。

「悪夢」の言葉は、僕の心の声だ。

あれから毎晩、「悪夢」は僕のもとを訪れた。

僕をぐるぐる取り囲み、同じ話をささやく。杉原さんが好き

なのは僕じゃない。異世界の人間だ。これは、裏切りだ。

うるさい！と僕は怒鳴ったし、魚を殴りつけようとした。魚などいないかのように、無視し続けようとした。けれど「悪夢」は、話を信じたくなくて抗う僕を、憐れむように笑っただけだった。ぱっくりと口を開けて、『お前は騙されたのだ、かわいそうに』と。

実体をもたない「悪夢」には、拳も言葉も沈黙も、僕の抵抗の全てがすり抜ける。僕が疲れ果てて、覚えもなく眠りに落ちるまで、魚はずっとしゃべり続けた。

魚は実体がなくても、僕は生身の人間だ。家族には、夜中に僕が一人で暴れていると思われるようだった。

「悪夢」とやり合った翌朝、母さんが怯えた顔で「何か悩みがあるの？」と聞いてきた。父さんも沙也も、そ知らぬ顔で朝食をとりながら、僕の様子を探っているようだった。それがあって、僕はあいつを追い払うことを諦めた。

どうしようもない。魚はただ現れて、しゃべり続けるだけだ。それ以外の実害はなかった。ただ僕が最悪な気分になって、寝不足になるだけだ。

少しずつ、僕の食欲は失せたし、頭痛も頻繁に起こるようになった。学校には行けるけど、絶えず疲れたような倦怠感が抜けない。授業にも部活にも、身が入らない。

でも、どうしようもなかった。

こんなこと、誰にも言えないから。

「嶋本、お前大丈夫か？」

前の席の吉岡がそう声をかけてきたのは、「悪夢」と初めて会ってからちょうど一週間たった日だった。

「目の下、すげえクマだぞ。顔色も悪いし……」

吉岡が、僕の顔を覗き込む。心配そうなその目から逃れたくて、僕は頬杖をついてうつむいた。

「そうかな……」

「だってお前、さっきの授業寝てただろ？寝不足？」

その通りだったけど、僕は苦笑で誤魔化そうとした。

「寝てねーよ。前の席なのに、なんでわかるんだよ」

「だって、いびきが聞こえた」

眉を寄せて吉岡が言う。僕は笑いが引つ込んで、思わずまじまじと吉岡を見返した。

「……嘘だー」

「マジだよ」

うわーと思わずうめいて、僕は天を仰いだ。両手で顔を覆って、大きく息をはく。

教室でいびきをかくなんて、めちゃくちゃ恥ずかしい。寝不足が続いていたとはいえ、大失態だ。

「……いびき、大きかった？」

心配になって聞くと、吉岡はニヤリと笑った。

「おう。先生もほっとけて、呆れてたぞー」

バーカと笑う吉岡から、気まずくて顔をそむけた。

そむけた先で、杉原さんと不意に目が合った。遠い席から、杉原さんは眉をひそめてこちらを見ている。

大丈夫？

そんな声が、聞こえてきそうな顔だ。杉原さんはたぶん、僕を心

配してくれている。

けれど、僕の胸に湧き上がったのは怒りだった。

杉原さんには関係ないだろ。心配なんて嘘。どうせ僕のことを、授業中にいびきをかくなんて、馬鹿なやつだと思っているんだ。

コントロールできない強い憤りに、僕自身が戸惑った。

どうかしてる。杉原さんに、そんなことを思うなんて。きっと、寝不足で気が立っているんだ。

もやもやした気持ちを抱えたまま、僕は目をそらした。

九 醜い僕

「新くん」

階段の踊り場で、杉原さんに呼び止められた。教室移動の最中だった。

振り向くのが、ひどく億劫だった。僕は、わざと彼女を避けていたから。

杉原さんは制服のスカートの端をぎゅっと握りしめ、決意をもった瞳で、僕を見つめている。

あ、少し顔色が良くなったな、と思った。杉原さんは険しい表情をしているけど、少し前よりはずっと健康そうな様子だ。目に力があるし、引き結んだ口元にも、本来の澁刺さが戻っているように感じた。

元気になったんだ、よかった。そう思ったはずなのに、僕の口から出たのはよそよそしい言葉だった。

「……何か用？」

「新くん。夜、眠れてる？」

杉原さんは真つすぐ聞いてきた。

「ひどい顔だよ。すごく、疲れてるみたいだし。あのね、もし、何か悩んでいるなら」

「うるさいな」

何か考えるより先に、そんな言葉が飛び出た。自分でも理由がわからないくらい、気分がささくれて苛立っている。

何か悩んでいる？ そうだ、悩んでいるに決まってる。そもそも、全部杉原さんのせいじゃないか。

「杉原さんには、関係ないだろ」

杉原さんから目をそらして、僕は窓の外を見た。薄暗い踊り場とは対照的に、外はからりと晴れている。白いグラウンドが、やけに遠くに感じた。

「でも、新くんは」

杉原さんは、なおも言いつのろうとした。僕は正面から、杉原さんに向き合った。

自分が、ひどく意地悪な顔をしているとわかった。

「……そっちから、切り捨てたんじゃないか。もう僕に、関わりたくないんだろ？ 別の奴が好きなんだから」

杉原さんが息をのんだ。灰色がかった瞳が揺れる。

僕と杉原さんの間にある溝が、今や決定的となったのだ。僕がそうした。わかっていてやったのに、傷ついた杉原さんの顔を見ていたくなくて、僕はうつむいた。

「……もう、放つといってくれよ」

そう吐き捨てて、僕は逃げるように階段を駆け降りた。杉原さんは、追ってこなかった。

魚はなぜか、ひどく上機嫌だった。いつもよりせわしく宙を泳ぎ、尾ひれを大きく波打たせた。極彩色のグラデーションも、目が眩むような変化を繰り返す。

ベッドの隅で壁にもたれて座り、僕はぼんやりとそれを眺めていた。

今日も、眠れないのかな。

『あの女の顔を見たか？あの驚きに瞠られた目を』

夜ごと杉原さんの裏切りを繰り返す「悪夢」は、今日は様子が違った。昼間のことを、弾んだ口調でしきりに話している。ギザギザの声はぐんとピッチが高くなり、耳障りさが増した。

『お前に傷つけられるとは、思いもしなかったのだろうよ。だから驚いたのだ。お前を、侮っていたのだ』

衝撃に打たれたような、杉原さんの表情がよみがえった。

あんな顔、初めて見た。

僕にとつての杉原さんは、いつも笑っている人だった。みんなから失笑をかうような僕の下手な冗談に、ころころ楽しげに笑ってくれた。彼女の前で緊張して、僕がぎこちない行動をとった時も、決して馬鹿にすることはなく、ただ穏やかに微笑んで見つめてくれていた。

いつも杉原さんの笑顔には、包み込むような温かさがあった。だから僕も、彼女の前では普段より多く笑っていたんだ。

ああでも、あれは偽物なんだっけ。

『あの女を見返してやったのだ。あの女に傷つけられた分だけ、お前もあの女を傷つけることができるのだ。』
どうだ、気分がいいだろう？』

杉原さんを傷つけたことなんて、もう既に思い出したくもない、最悪なできごとだ。もう二度と、彼女のあんな表情は見たくない。あんな表情をさせることを、二度としたくない。

けれどあの時、僕は確かに気分が良かった。杉原さんの表情が歪んで、ひどく暗い喜びを感じた。自分の手で彼女を傷つけることができたのが、嬉しかったのだ。

とんだ最低野郎だ。自分がこんな醜い感情の持ち主だなんて、知らなかった。もしかしたら、この僕の醜悪さを直視したくないから、思い出したくないだけなのかもしれない。

『どうだ？』

「悪夢」が共犯者のように、にやりと笑う。僕は目を閉じた。
「……そうだね」

僕は初めて、「悪夢」に同意した。

こいつの言葉はたぶん、真実だ。

十 ホットミルク

深夜番組がこんなにつまらないとは思わなかった。テスト前の夜、勉強の息抜きに見る時は、おもしろすぎてつい延々と見てしまうのに。情性でテレビをつけてみても、何にも入り込めない。

番組がアイドルの水着コーナーとかだったら、まだおもしろく見れたかもしれない。けどあいにく画面の向こうで繰り広げられているのは、トークバラエティーだった。どうでもいい話をする人々を、僕は冷めた気持ちで眺めた。

リビングのソファに座って、僕はぐずぐずと起きていた。僕以外の家族はみんな、既に布団に入っている。だからテレビの音量も、最小限に落としてあった。正直、笑い声以外何を言っているのかわからない。けどあまり見る気もないから、聞き取れなくても構わなかった。

なぜ眠らないのか。その理由は1つだ。

「悪夢」が、恐ろしいから。

部屋に入ってベッドにもぐりこんだら、あいつが出てくるのはわかっていて。あの毒々しい姿を見たくない。あの声を、真つ暗な言葉を感じたくない。

要するに、僕はあの「悪夢」が怖いのだ。あいつの言葉にぐらぐら揺さぶられ、不安を植えつけられるのが嫌だった。魚が僕の周りを泳ぐと、ベッドに縫い付けられたように動けなくなる。夜が深く重く覆いかぶさってきて、絶望的に息苦しくなる。

その全てが怖かった。

自分が情けない。あんな実体のない魚に、こんなにも怯えるなんて。

でも、どうしようもなかった。僕にできるのは、こうして「悪夢」が現れないように、起きていることだけだった。

眠れないでいるよりも、起きている方がまだマシだ。

「部屋で寝なよ、あつくん」

急に声が聞こえて、僕ははっとして顔を上げた。

目の前のテレビは、まだついていて。慌てて周囲を見回すと、リビングの入り口に沙也が立っていた。眩しそうに目を細め、あくびをかみ殺している。

どうやらいつの間にか、寝入ってしまったようだ。僕はしばらくぼかすむ目をこすった。沙也につられて、大きなあくびが出た。

「……まだ起きてるつもりなの？」

さつきより少しはつきりした口調で、首を傾げて沙也が聞いた。僕はぼんやりしたまま、あやふやに答えた。

「ん、まあ……」

「ふうん」

関心が薄そうに呟くと、沙也は静かにリビングに入って、冷蔵庫を開けた。

喉でも乾いて、起きてきたのだろうか。なんとなく沙也を目で追いながら、僕はうまく働かない頭で考えた。

マグカップに牛乳を注ぎながら、沙也は何の気なしに言う。

「あつくん、眠れないんだ。彼女と何かあったとか？」

意外にも凶星を突かれて、僕は眠気が少しとんだ。

いつもの外れなくせに、どうしてこんな時だけ鋭くなるんだ。ちよつとムツとして、僕は黙りこんだ。何も事情を知らない沙也に、あれこれ言われたくなかった。

沙也はマグカップを、そのまま電子レンジに入れた。そうして牛乳を温めている間、ごそごそと台所の棚を探り出した。

こんな夜中に、一体何をしているのだろう。僕はますます不審に思った。腹が減っているのだろうか。こんな時間に食うと太るぞと、嫌味を言ってやろうか。

「……何してんの？」

耐えきれなくなつて、僕は尋ねた。沙也は「んー？」と、眠そうな柔らかい声で返した。

「眠れないあつくんに、プレゼントだよ」

温めた牛乳に、沙也は棚から出した蜂蜜をとろりと注いだ。入れすぎだろ、と思うくらいだ。それをスプーンでかき混ぜながら、沙也は僕の方に近づいてきた。

はい、と白いマグカップが差し出される。

「沙也特製ブレンドのホットミルクです。どうぞ」

ほのかに湯気を立てている牛乳と、沙也の顔を、僕は交互に見つめた。つつい、ぽかんとしてしまう。

「……なんで？」

なんで僕に、ホットミルク？

ぼろりと出た僕の疑問の声に、沙也は明らかに気分を害した顔をした。ぐいと、温かいマグカップを僕に押しつける。

「いいから、早く受け取りなよ。せつかく作ってあげたんだから」
頼んでもないのに、どうして怒るんだ。ちよつと理不尽に思ったけど、僕はカップを受け取った。ふわりと、特有の甘いにおいが鼻をかすめた。

沙也はテーブルの椅子をわざわざ引つ張つてきて、それに行儀悪くあぐらをかいて座った。

「これで、借りは返したからね」

カップに口をつける寸前、その満足そうな言葉を聞いて、僕は手を止めた。

「借り？」

何か僕は、沙也に貸しがあつただろうか。記憶を探るけど、全然

心当たりがない。

首を傾げる僕に、沙也は不満げに唇をとがらせた。

「覚えてないの？　もともとそれは、あつくん特製ブレンドだったでしょう」

僕特製ブレンド？　思わずホットミルクをまじまじと見つめる。

これを作ったことなんて、あつただろうか？

「去年私が受験生だった時、あつくんが作ってくれたんだよ。私が夜中、ストレスでキレてた時に。『これ飲んで、寝ろ』って言って、それを聞いても、やっぱりよく思い出せなかった。」

でも言われてみれば、そんなこともあつたかもしれない。去年、沙也は高校受験を控えて、一時期とても不安定でピリピリしていたことがあったから。当たり散らされるのが嫌で、僕は当時沙也にあまり関わらないように遠巻きにしていた。でも、レベルの高い難しいところを受ける奴は大変だなあと、ちょっと気の毒に思っていたんだ。

「私、ホットミルクってくさみがあるからあまり好きじゃないけど、その時はすごくびっくりしたんだよね。効果抜群だったから。一口飲んだだけで、トゲトゲした気分がおさまっちゃったの」

椅子にもたれて、沙也は懐かしむように目を眇めた。

話につられて、僕もミルクを一口飲む。

甘ったるい。

けれど僕は続けて、二口、三口と飲んだ。

「ただ牛乳を温めただけなのにね。不思議だよね」

それだけ言うと、沙也は「じゃ、おやすみ」と立ち上がった。

「あつくんも、早く寝なよ」

リビングを出る直前、沙也は振り返ってそう言った。

マグカップに口をつけていたので、僕は手を振るだけで答えた。

妹に気を使われるのは、嬉しい半面、兄としてはちょっときまりが悪かった。

でも、沙也の話は本当だった。甘いホットミルクを飲むことに、気分が落ち着いていくのがわかる。蜂蜜が多くて甘すぎると思うのに、結局、僕は全部飲み干した。

しばらくすると、自然に眠くなってきた。あくびをしながら歯を磨いて、僕は部屋へ戻った。ベッドにごろりと横になると、眠りはすぐに、やってきた。

その日、「悪夢」は来なかった。

十一 対峙

「新、部活行こうぜ」

教室の入り口からひょいと顔をのぞかせて、和志がほがらかに言った。

いちいち、迎えに来るのはやめてほしい。僕は面倒くささに眉を寄せながら、カバンを肩にかついだ。

「……迎えに来なくても、ちゃんと行くよ」

「いやいや、別に、俺が新と行きたいだけだつて」

嘘くさい笑顔を浮かべて、和志は白々しく言う。

何が一緒に行きたいだ。僕にはわかつてる。こいつは、見張り役のつもりなんだ。

早退事件があつてから、僕は部活内でちょっと腫れものに触るような扱いを受けていた。部の女子たちから、変に心配されたり、励まされたりしている。

あの赤川さんからも、気を使われているようだった。僕が音を外した時、それを指摘する赤川さんの言葉の鋭さが、いつもの3割は減っている。むしろ、こっちが気まずくなるくらいだった。

つまり合唱部の全員に、僕がふられたことが広まっているらしいのだ。こういう時、女子の割合が高い部活は本当にウワサが早い。男連中は和志以外、情けで知らん顔してくれる。でも女の子たちの憐れみの視線は、正直部活へ行きたくなくなるほどだった。

「今日、パート練は何やんの？」

「そうだな、重唱の仕上がりが遅いから……」

言いながら廊下に出て、パート部屋の教室へ歩き出す。

その時だった。

「新くん、ちょっといいかな」

杉原さんが、追いかけてきた。

隣の和志がぎくりと足を止めたので、僕も仕方なく立ち止まった。振り返ると杉原さんが、笑みを浮かべて立っている。けれどその目は、ひどく真剣だった。

和志が焦ったように、僕と杉原さんへ交互に目配せした。その視線を無視して、僕はできる限りそっけなく言った。

「ごめん、部活あるから。和志、行こう」

けれど、杉原さんは引かなかった。和志がまごついて動かないうちに、にっこり笑って言った。

「ごめんね、長谷川くん。部活の人に、新くんは遅れるって言ってもらえるかな」

「う、うん……」

戸惑いながらも、和志は頷いた。一度ちらりと僕の方を見たけど、そのまま身を翻して、逃げるように走り去った。

僕は舌打ちしたい気分だった。どうして、あいつは杉原さんの言うことを聞いたんだ。放っておいてほしいとは思ったけど、何もこのタイミングでいなくなってもいいのに。

杉原さんは改めて、僕に向き直った。

「そんなに長くはかからないから。話せない？」

「……わかった」

諦めて、僕は頷いた。

杉原さんの後についてやってきたのは、特別教室棟だった。

「悪夢」に、初めて会った場所。前と同じく薄暗くて、しんと静まり返っている。グラウンドに響く運動部のかけ声も、ここからは遠い。

普段この時間は、金管バンドが棟を占拠している。けど、今日は金管バンドが音楽室を使って合奏をする日だ。だから合唱部は音楽室を明け渡して、パート別に練習をする。僕は男声のリーダーだか

ら、本当は誰より早くパート部屋へ行って、練習を仕切らなきゃいけない。

でもどうせ、名ばかりのパーリーだ。男声はみんな勝手に、個人練習を始めているだろう。

杉原さんは特別教室棟の突き当たりまで、すたすたと歩を進めた。そして一番奥の、物置となっている教室の扉を開けた。ちょうど、前に僕が入った美術準備室の、隣の教室だった。

「中で話そう。……邪魔が入らないように」

杉原さんは中を指差して、僕を促した。僕は黙って扉をくぐる。

物置教室は、使っていない机と椅子が壁のように高く積まれている。ブラインドの隙間から傾いた日差しが薄く入って、部屋を舞うほこりを白く光らせている。あまり、長居はしたくないような場所だ。

「……それで、何の用？」

急かすつもりで、僕は聞いた。杉原さんは扉をぴつたりと閉じると、僕を真っすぐに見つめた。

明るい灰茶の瞳に、吸いこまれそうだ。

「新くん。あなたは、『悪夢』にとり憑かれています」

何を言ってるんだ、と僕は笑おうとした。けれど口から出たのは、僕の言葉じゃなかった。

『その通り。だがもう遅い』

その瞬間、視界が虹色に燃えた。

目がおかしくなった！

僕は動転して、とっさに両手で顔を覆おうとした。けれど、指一

本さえ、動かなかった。

体の自由がきかない。パニックを起こした感情とは裏腹に、実際の僕は小揺るぎもせず立ったまま、薄ら笑いを浮かべていた。

『手を打つのが遅かったな。この男は最早、我に取り込まれた』

喉をこじ開けて、僕のものではないギザギザの声が出る。自分の体なのに、全くコントロールできない。雁字がらめに縛られたような、ひどくおかしい感覚だった。

ますます混乱する僕を置きざりに、「僕」はしゃべり続ける。

『なかなか時間がかかったよ。こちらに渡り、我の力も衰えた。

お前の力ほどではないが』

僕の視界は歪み、流動する暗い虹色で覆われていた。

吐き気がするような「悪夢」の色だ。その中で、ただ杉原さんだけがくつきりと正常な色と形をして、浮かび上がっていた。

杉原さんは、こちらを厳しい表情で睨みつけている。

「新くんから離れなさい。お前の敵は、私でしょう」

『そうだ。だがこの方法は、なかなか有効だろう？』

「僕」はにやりと笑って、僕を指差した。

杉原さんは苛立ったように、眉をつり上げた。

「新くんを巻き込むなら見過ごせない。その人は、関係ないの。解放しなさい」

その言葉は思いがけないほど深く、僕をえぐった。

関係ない。

そうなんだ。僕と杉原さんは、もう何も関係がない。彼氏彼女じゃないし、杉原さんの好きな奴は僕じゃない。

「悪夢」や異世界について、僕たちは共有しているようでいて、全くそうじゃなかった。僕は本当は、杉原さんのことなんか全然知らないんだ。

そのことが急に、とても悔しくて憎らしくなった。杉原さんに対して、強い憤りが湧き上がる。僕は拳を、ぐっと強く握りしめた。

関係ないだって？馬鹿にしてるのか？

「僕」の口から、上ずった笑い声が飛び出した。

『そうだ、あの女を憎め。その憎しみで貫け。 あの女を、消してしまえ！』

僕ははっとした。気付けば指先に、自分の感覚が戻っていた。

拳を握ったはずの手が、冷たい。僕は呆然と、右手を見下ろした。

いつの間にか僕は、一振りの剣を握っていた。

十一 対峙（後書き）

パーリー＝パトリダー です。
うっかりしてましたが、一般用語じゃないですね、これ…

十二 わかりたい

意識した途端、手にずっしりとした重みがかかった。

幻じゃない、本当の剣だ。

僕は呆然としたまま恐る恐る、剣を持ち上げた。鋼の重みで取り落としそうになって、慌てて両手を使う。

視界の色に溶け込むような、「悪夢」の色をした剣だった。けれどよく研がれた刃と、柄の先に嵌まった玉は、何の光も弾かないほど黒い。夜を閉じ込めたような暗い色だった。

『それはお前の憎しみだ。我が手を貸してやった。お前の剣だ』頭の中で、「悪夢」がささやく。

武骨な剣だった。刀身の長さは指先から肘くらいまで、全体的にのっぺりと幅が広く、鈍器のようだ。すらりと腰に佩く剣ではなくて、小人が野蠻に振り回すような。

こんなにも重くて、冷たい。真っ黒な刃からは、一つの意図しか感じない。

これは、人を斬りつけるための、道具だ。

それがわかって、背筋が寒くなった。

今僕が持っているものは、人を傷つけるための武器だ。凶器となるものだ。おぞましく感じられるのも当然だった。なんて醜い剣だろう。

これが、僕の？

ぞっとした。もう持っていていられなかった。僕は、剣を投げ捨てようとした。

でも、手が離れない。

「何だ、これ……！」

必死になって、柄を握る右手を開こうとする僕に、「悪夢」が怒

鳴った。

『何をしている　剣を捨てようというのか!』

「悪夢」は煙がわつと立ちのぼるように、突然僕のすぐ目の前に現れた。牙をむき出し、血走った目で睨みつけてくる。

『あの女が許せないのだろう。ならば斬れ!』

そんなこと、できるはずがない。

「悪夢」は恐ろしい形相だったけど、僕はそれどころじゃなかった。一刻も早く、この剣を手放したくてたまらない。ぐっと力をこめて、右手を振った。ガチャガチャと、剣がいびつな音をたてた。

『馬鹿な!』

「悪夢」が吼える。

「……ここは、『あちら』とは違うのよ」

静かな声がして、僕ははっとして動きを止めた。

杉原さんだった。凜とした表情で僕を　いや「悪夢」を見つめている。水面のような瞳は、あくまでも平静だった。

「新くんは『あちら』の騎士じゃない。剣を持っても、考えることは『あちら』の人とは違う。……新くんは、こつちの世界の人だから」

落ち着き払って、杉原さんは「悪夢」に言い放った。

「お前は、それを間違えたんだ」

『この、腰ぬけが!』

「悪夢」は怒り狂って、わめき散らした。長い尾ひれが、発光するように激しく色を変える。

けれど僕は反対に、落ち着きを取り戻していた。杉原さんの目を見て、訳のわからない恐怖に圧されていた心が、すっと凪いだ。

不気味な剣を早く捨てたいのは変わらない。けど、やっと少し周りが見えるようになった気分だった。

歪んだ色彩の中で、ただ1人杉原さんだけが変わらない姿を保って、背筋を伸ばして立っている。制服の白さが、濁った周囲の中で

は眩しいほどだった。

異世界で、特別な存在だったという杉原さんを、垣間見た気がした。

ああそういえば、杉原さんの話を聞いていない。

僕はふと、そのことを思い出した。ここで「悪夢」に出会う前、本当は杉原さんを追いかけて、話をしようと思っていたんだ。何を考えているのか、彼女の心が知りたいと。

でもそれから、僕の方から避けるようになってしまったんだっけ。僕は知らず知らずの内に、杉原さんと話をする機会を逃したんだ。なぜあの時元気がなかったのか。なぜ皆を避けていたのか。それを知る大切な機会を、失ってしまった。

僕はやっと、そのことに気付いた。頭の中のもやが晴れていくようだった。

……杉原さんのことを何も知らないのは、僕自身がそれを避けたせいだ。

「……杉原さん」

呼びかける声はかすれた。杉原さんははっとして、僕を見た。

「新くん、大丈夫？」

僕は頷くことも忘れて、彼女を見つめた。心配そうな、その表情を。

今からでも、わかることができるのだろうか。杉原さんのことを。

「異世界に、『あちら』に好きな奴がいるって、本当？」

大きく睜った瞳が揺れた。杉原さんは不意打ちに竦んだように、胸元のリボンをぎゅっとつかんだ。

けど、杉原さんが動揺を静めるのはすぐだった。一度目を伏せて再び顔を上げた時、彼女はふっと微笑んだ。

「本当だよ」

わかっていた答えだけど、やっぱりつらかった。全部吹っ切ったような杉原さんの顔を、真つすぐは見れなかった。

「……だからあの日、帰ってきたときに、『別れよう』って言ったの？」

ゆっくりと杉原さんは瞬いた。複雑に動いた感情を抑え込むように、一度口元を引き締めてから、言った。

「……それも、ある」

ずいぶん、いろんなものを含んだ答え方だった。

けど、僕は追及しなかった。聞きたいこと、話したいことは、まだまだたくさんあった。

「どんな奴？……杉原さんの、好きな奴は」

「えっ？」

虚をつかれたように、杉原さんはぽかんとした。そして口元に手を当てて、考え込むように目を伏せた。

「そうだね。……厳しい、人だったよ。自分にも他人にも。騎士として、責任感の強い人だった」

まぶたにそいつの顔が浮かんだったろうか。杉原さんはふと、柔らかに笑った。

見たことのない、笑みのかたちだった。

「でも、優しい人だった」

「そっか……」

何とも言えず、僕はそんな相づちを打った。もし手が自由だったら、がりがり頭をかいていたと思う。

自分で傷をえぐっているみたいだった。杉原さんに別の奴のこと

をのろけられるなんて、最悪だ。ショックでひどい気分だった。

でも、知りたいと思ったのは僕なんだ。

「そいつはさ」

「新くん。この話、また今度ちゃんとしよう」

杉原さんが急に、強く遮った。

「今こんなこと、話してる場合じゃなかった」

彼女の目はもう、僕を見ていなかった。宙に浮かぶ魚を、厳しく睨みすえていた。

『だがお前に、何ができる？』

「悪夢」は僕が間抜けな質問をしている間に、余裕を取り戻したようだった。ばかりと口を開け、嘲け笑って杉原さんを見下ろした。

『この男が剣を欲しないというのは、確かに我の誤算だった。だがお前は最早ただの人。脅威ではない』

悠々と、魚は僕の頭上を泳いだ。杉原さんはぐつと唇をかむと、険しい表情のまま僕に振り向いた。

「新くん、お願い。『悪夢』を遠ざけて！」

「え？」

激しい口調のその指示に、僕は途方にくれた。

遠ざけろ、と言われても。呆然とする僕に、杉原さんはきびきびと言う。

「『悪夢』は新くんにとり憑いたから、力を得ているの。新くんと切り離せば、こいつは弱くなるはず」

「う、うん。でも」

僕はまたガチャガチャと、剣を揺すった。

「どうやればいい？離れないんだ　この剣も、魚も」

これまでの夜に何度、「悪夢」を追い払おうとしただろう。でも何をして、全て魚の体には届かなかった。僕が「悪夢」に対して

無力なことは、もう十分身にしみている。

こいつを遠ざけるのは、僕には無理なんだ。

「魚？」

杉原さんは驚いたように瞬いた。

「新くんは、『悪夢』が魚に見えるの？」

「違うの？」

僕も驚いた。間違えようもなく、「悪夢」は魚の姿をしている。

もちろん、とがった牙や赤い舌なんか、普通の魚とは全く違うけど、杉原さんはつかの間呆然としていたけど、片頬を上げてふっと苦笑した。

「そうか、本当に人によって、違うんだね」

どういうこと、と僕は問い返そうとした。でもその隙はなかった。魚が再び目の前に下りてきたのだ。

尾ひれを扇のように広げ、「悪夢」は僕と杉原さんの間に立ちふさがった。その近さに、僕は息をのんだ。

『お前もこれ以上使えぬ。我がやろう』

長いひれが僕を飲み込んで、閉じ込める。周囲の何もかもが見えなくなった。

「新くん！」

悲鳴のような、杉原さんの声が聞こえた。

いつかと同じように、ぬるりと膜をはったような「悪夢」の目が、僕を見すえた。魔法にかけられたように、それに囚われる。思わず手の中の剣を、すぐるように握りしめた。

『さあ、お前を明け渡せ』

ダメだ。僕は固く目をつむった。

十三 銀の剣

ぎゅっと目をつむって身を固くする僕が、まず思い出したのはにおいだった。

真っ暗な闇の中に、まるで白い手が優しく差しのべられたかのようだった。甘いにおい。覚えのある、温かいにおい。

これは、何だっただろう。僕は夢中で、そのおいの記憶をたぐりよせた。藁にでも何でも、すがりたい気分だった。この「悪夢」から、逃れられるなら。

白いマグカップ。温かい湯気。甘い、蜂蜜が多すぎるんだ。やっとにおいも味も思い出して、思わず肩の力がすんと抜けた。

ああ、これはホットミルクだ。

眠れなかった夜に、沙也がつくってくれたやつ。甘ったるかったけど、僕は全部飲んだんだった。

ただ牛乳を温めただけなのにね。不思議だよね。

あの時の、沙也の声がよみがえる。

本当に、不思議だった。ただの飲み物なのに、まるで万能薬のようだったから。不安や恐れを安らぎに変えて、眠れない夜を打ち破ったのだ。効果抜群、特製ブレンド。沙也の言うとおり、あれはすごかった。

あの夜、「悪夢」はやって来なかったのだから。

僕は目を開いた。視界を覆った毒々しい色は、消え失せていた。
『馬鹿な 』

呆然としたような、「悪夢」のうめき声がした。

急にもとの色と形を取り戻した視界に、僕自身とても戸惑った。何度も、瞬きを繰り返す。何もおかしいところのない、いつもの正

常な世界が、こんなにも安心するものだとは思わなかった。

目を慣らすために、周りを見回す。僕のすぐ横に、魚は浮かんでいた。ぽかんと、力なく口を開けている。なぜか魚の姿が、急に小さくなったように感じた。

「すごい……」

杉原さんも驚いたように、何度も瞬いた。宙に浮く「悪夢」と僕を見比べて、呆然と問いかけてきた。

「今、どうやってやったの？」

「いや……さあ」

僕は首を傾げるしかない。

今、僕は何かをしたのだろうか？目を閉じていたから、全然わからない。ただ縮こまって、ホットミルクのことを思い出していただけだ。唯一僕が、「悪夢」を遠ざけた夜のことを。

見える景色は元に戻ったけど、手の中の剣は相変わらず、へばりついて離れなかった。それに目を落として、もう一度何とか手を開こうと試みる。正常な世界で見る剣は、その異様さが際立っていた。「悪夢」の剣なのだと、はつきりわかる。

『ふざけるな！』

耳をつんざくような罵声を吐き、「悪夢」は牙をむき出しにした。『この男の加護はそれほど強くなかったはずだ。何をした？力を隠していたのか！』

「……私じゃないわ」

杉原さんはゆるゆると首を振った。

「私は何もしてない。もう、何の力もないから」

淡々とした口調だった。悔しさも悲しさも読みとれない。拳をぐっと握り締めて、杉原さんはただ静かな表情で、「悪夢」に向かい合っていた。

対する魚は激昂していた。体が攻撃的に膨れ上がり、わめく声は金属を引っ掻いたようにかん高い。

『今更、命が惜しくなったのか？我を謀ったか。罰を受け入れると

言ったのは、偽りだったのか!』

「言った。それは嘘じゃない」

杉原さんはきっぱりと言い切った。

「でもお前は、新しく人を巻き込んだ。それは許せない。……私のところだけに来ればよかったのに」

なぜか彼女の口調は、「悪夢」を責めるようだった。

「私だけにとり憑いていたなら、あのままお前の望み通りだったよ。私は邪魔しなかった。私だけなら」

「ちょ、ちよつと待って」

僕は慌てて割って入った。とても黙って聞いていられなかった。

「悪夢」と杉原さんが何を話しているのか、全然わからない。わからないけど、聞き捨てならなかった。

「……どうということ？」

僕は杉原さんをじつと見つめた。その静かな表情に、彼女の心のヒントが映りこまないか、必死で探る。

「『悪夢』の望み通りって、何？」

焦りを感じて、僕は重ねて聞いた。

僕が「悪夢」に遭遇する前のことが、頭にフラッシュバックする。あの時、杉原さんは元気がなかった。顔色が悪くて、みんなを避けていた。まるで存在が薄くなって、遠くへ行ってしまうかのようだった。

僕は、杉原さんがどんどん透明になっていくみたいで、怖かったんだ。

「杉原さんは、消えたいの？」

あの時、「悪夢」が僕にねらいをつける前、杉原さんの方を訪れていたのだとしたら。そしてそれを、杉原さん自身が受け入れてい

たのだとしたら。

それが、元気のなかった理由だろうか。杉原さんは「悪夢」にとり憑かれても構わないと、そう思っていたのだろうか。
なぜ？

僕は愕然として、杉原さんを見つめた。

杉原さんは困ったようにふつと微笑んで、目を伏せた。でも、何も言っではくれなかった。その沈黙に、僕は息をのむ。

本当に、僕は何も知らないんだ。

衝撃に打ちのめされそうだった。杉原さんのこと、全然知らないって、わかってはいたけど。本当にかけらさえ、僕は理解していないのかもしれない。

「悪夢」の望み通りになっていいと、消えてしまっただけかまわないと、杉原さんが思っていたなんて。

体中の力が抜けそうだった。無力感に、僕は呆然とした。

杉原さんのこと、異世界のこと。まだ僕は、ほとんど打ち明けてもらっていないんだ。

また杉原さんに対して、怒りがわいてきそうだった。失望を感じて、僕はうつむいた。

下げた視線の先に、「悪夢」の色をした剣がある。

柄の先に嵌めこまれた真つ黒な玉を見ているうちに、僕の怒りはだんだん強くなった。杉原さんにじゃない、僕自身に対する怒りだ。

打ち明けてもらっていないって、そりゃそうだ。誰がこんな奴に大切な話をしたいなんて思うだろう？全然頼りにならない、何もできない、そのくせ心にこんな醜い剣を隠し持っていた奴に。

こんなじゃ、ふられて当然かもしれないな。

僕は初めて、そう思った。杉原さんに別の好きな人がいなくても、

こんな僕では、やっぱりダメだったかもしれない。

この剣で杉原さんを傷つけたいと、ちよつとでも思ってしまったような僕では。

自分が情けなくて、僕は目を閉じた。

でも好きなんだ。どうしたらいい？

『 思い出せ、お前は裏切られたんだ。許せないと、傷つけたいと、思っただろう。ならば憎しみをもって剣を振れ！その女を、葬るんだ！』

「悪夢」はわめきながら、僕の周りをぐるぐる回った。

でも、力が弱まったことは一目瞭然だった。虹色の体はさらに透き通って、耳障りな声もどこか遠い。だから僕は簡単に、無視することができた。

杉原さんだけに、集中できる。

大好きな彼女しか目に入らない。

「……あのさ、花火大会のことなんだけど」

笑うつもりはなかったけど、もしかしたら僕は、微笑んでいたかもしれない。自分でも驚くくらい、穏やかに話すことができたから「覚えてる？あの時のこと」

これはちよつとした賭けだった。

杉原さんは真顔になってまじまじと僕を見つめてから、少しだけ笑った。苦笑じゃなければいいと、僕は思った。

「 心がこつちに戻ってきた時ね」

杉原さんはゆっくりとしゃべり始めた。

「不思議だったけど、『あちら』にいた私とこちらの私が、ずっと溶け込むみたいになっただんだ。どちらも私だった。合わさった時、どちらが消えることもなかった。だから」

杉原さんの笑みが深くなった。

「……ちゃんと、覚えてるよ」

よかった。僕はうつむいて、笑顔を隠した。照れくささより、嬉しさの方が大きかった。なかったことになっているのだと、ずっと思っていたから。花火大会に言って、初めてキスしたこと。僕だけしか覚えていないのだと思っていた。

その思い出が大切に特別に感じているのは、僕だけなんだって、ずっと悔しくて腹が立って、悲しかった。

でも、覚えていてくれた。

その少しの特別に、すがりたかった。

こっちに残っていた杉原さんも、紛れもない杉原さんだというなら、まだ、望みはあるんじゃないか？ふられたけど、僕が諦める理由にはならない。だって、全部が偽物で嘘だったわけじゃ、ないんだ。

もしまだ僕に、チャンスがあるなら。

「じゃあ、杉原さん。……消えないでよ」

杉原さんが消えたいと思っけていても、僕は消えてほしくない。やり直したいし、ちゃんと向き合いたい。今度こそ、杉原さんのことを知りたい。

顔を上げると、杉原さんはちょっと呆然としているように見えた。途方に暮れたようなその顔に、僕は笑いかけた。そして、「悪夢」に向き直った。

「悪夢」の方も、ぽかんとしているようだった。あれだけ堂々と揺らめいていた尾ひれも、今はしぼんで、布切れが引っかかっているくらいにしか見えない。こいつをなぜあんなに恐ろしく思ったのか、もうわからなかった。

「僕は杉原さんを消したいとは全く思わない。むしろその逆だ。だから、これはいい」

今なら、剣を手放せると思った。憎しみなんか、もうない。僕は「悪夢」めがけて、剣を放り投げた。

でも、できなかった。

右手に吸い付いたように、剣は離れなかった。勢い余って、僕は剣をぶんと振り回した格好になった。遠心力に引っ張られて、ぐらりと体勢が崩れる。とっさに剣を杖のようにして、踏みとどまる。あやうく尻もちをつくところだった。

かろうじて、体を支える。予想しなかった動きに驚かされて、急に心臓の音が耳元で聞こえるくらい早くなった。僕は大きく息を吐いた。

情けない格好で顔を上げた時、そこに「悪夢」はいなかった。

「え」

ぼかんとして、僕は周りを見回した。物置教室に、おかしいものは何一つなかった。ただ僕と杉原さんが、呆然と立ち竦んでいるだけだ。

「……あいつ、どこ行った？」

「……わからない」

杉原さんも驚きに目を瞠って、「悪夢」がいたはずの宙を見つめた。そしてゆっくりと、僕に視線を移した。

「私には、新くんが『悪夢』を斬ったように見えた」

「え？」

僕らは顔を見合わせてから、そろって僕の右手に重くぶら下がっている剣を、見下ろした。

目を疑った。「悪夢」の色をした剣は、もうなくなっていた。

かわりに目の覚めるような銀色の剣を、僕は握りしめていた。

一 テンポ

「なんか、テンポ早くない？」

ヒロの声がして、僕はキーボードを弾く手を止めた。

男声パートの練習部屋は、1年生の普通教室だ。机を教室の前半分に寄せて、テノールとバスの男共合わせて9人でずらりと並ぶ。パートリーダーの僕だけ、前に立ってたまにキーボードで音を追いつつ、皆の歌を聞いていた。ずっと姿勢よく立つ男子に囲まれるのは、正直あまり心穏やかな状況じゃない。でも、的確な指摘もアドバイスもできないけど、こうやって練習をコントロールするのがパリーの役目なのだ。

思わず手を止めた僕につられて、歌声もうやむやに消えた。ヒロはニヤツと笑って、困惑気味の男声一同を見回した。

「さっきの16分音符のところ、みんないつも走るんだよ」

「つーか、今は新が早いんじゃないか？」

和志が首を傾げて指摘する。僕はどきつとした。

僕のせい、と言われたのもあるけど、そもそも走っていることにも気付かなかったからだ。

「ちよつと待って」

慌てて僕はメトロノームを引き寄せた。去年買ったばかりの、まだ傷もない黒いメトロノームだ。針を合わせて動かすと、つるりときれいな外見通りに、狂いなく指定のテンポを刻んだ。

明らかに、僕はこれより早いテンポでキーボードを弾いていた。練習中にぼんやりしてしまっていたけど、それはわかる。ヒロと和志をはじめ、皆が特にテノールの連中がどつと笑った。

「しっかりしてくださいよ、パートリーダー」

「なんかさあ、新、最近ノツてないよね」

気まずくて、僕は頭をかいた。冗談まじりに、名ばかりパーティーの実力のなさを責められた気がした。ヒロが軽く笑ってひよいと肩をすくめる。

合唱部にあるまじき、足が長くてぐつと締まった体つきのヒロは、そういう仕草が良く似合った。実際こいつは運動部ばりにスポーツが得意だし、顔もいい。どうして合唱部に入っただのか不思議なくらいだ。合唱部女子の少なくとも半分は、気のないふりをして実はヒロのファンなのだと、僕は知っている。

「俺さあ、前から思ってたけど」

ヒロは持っていた楽譜を丸めて、僕に向けた。

「新って、なんかいいことあると、テンポ早くなるよね」

「えっ、それマジで？」

和志が勢いよく声を上げて、身を乗り出した。キンと耳を刺するささに、僕は顔を顰めた。

「嘘だろ。和志、楽譜を放り投げるな」

ぴしゃりとそう断じて切り上げようとしても、ヒロはニヤニヤ笑いをやめなかった。

「いやいや、マジで。夏休み前だっけ、赤川にすげー怒られてただる。あの時そう思ったもん」

「夏休み前？」

和志がきょとんと聞き返す。

真面目な練習が、完全にくだけた雑談モードになってしまったようだ。割といつものことだけど、僕はこっそりため息をついた。こういうところを、赤川さんに怒られるのに。

「そ、新が彼女と付き合いだしてすぐの時」

さらりとヒロが言った。

途端に、皆が気まずそうな苦い顔になった。和志でさえぴたりと黙る。彼女、という言葉が今の僕にとってどれだけのダメージになるのか、恐る恐る窺うような視線を向けてきた。

その反応で、合唱部内にどれだけ僕の恋愛事情が広まっているかが、よくわかる。詳しいことは知らなくても、ふられたという結果だけは全員把握しているらしかった。好き勝手ウワサしないのはありがたいけど、気づかうような視線は、うっとおしいばかりだ。

けれどヒロはそれでも、自信ありげだった。
「俺、見たんだよね。昨日新が例の彼女と、図書館棟の脇にいたところ」

さつきより強く、どきつとした。まさか、見られていたなんて。
「マジかよ！」

和志が裏返った声で叫んで、男声パート部屋はにわかに騒がしくなった。

僕が静止の声を上げるより早く、ヒロは皆に聞かせるかのように、得意げに声を張り上げた。

「真面目な顔して話しこんでた。でも険悪そうな雰囲気じゃなかったから、仲直りしたんだと思ったんだけど？」

「おい、練習中なんだから、無駄話やめろよ」

焦って割って入ったけど、遅すぎた。めったにないパーリーらしい発言だったのに、すっぱりときれいに無視された。

「やるじゃん新、ちょっと見直した」

「結局どうなったんの？元サヤなわけ？」

「ついこの間、早退までした奴が」

口ぐちに、あれこれと言ってくる。合唱部の男子が、個人的な恋愛話にこんなに食いつくとは思っていなかった。

好みとかアイドルとかの話ならともかく、誰かの具体的な話なんて、普段あまりしないのに。彼女持ちの奴も少ないし、あまり生々しい話をするのは、みんな好きじゃないんだと勝手に思っていた。

……思い違いだったみたいだ。

収拾のつかなくなった騒ぎに途方に暮れて、僕は煽った当人のヒロを睨んだ。

「おい、テノール共。いい加減にしろ」

むつつりと地を這う低い声が、不機嫌に割って入った。

騒ぎの中心だったお調子者のテノールを、それだけで黙らせるのだからすごい。僕とは比べ物にならない重々しい力をもったその声は、森のものだ。今の騒ぎにも一切参加しない、筋金入りの堅物。いつそ潔いほどファツション性を無視した丸眼鏡を持ち上げて、森はぴしゃりと言った。

「無駄口を叩くな、練習中だ」

体は小柄なのに、森の声は太くて豊かなバスで、実力は合唱部一だ。上手いだけじゃなく練習態度も真剣で皆から一目置かれていて、だから発言に重みがある。

男声全体とテノールのリーダーは僕だけど、バスのリーダーは森が担っている。パーリーになってもおかしくないどころか、明らかに適任と思われる森だけど、そうならなかったのはちょっときつい性格をしているからだ。妥協せず音楽を追求していく姿勢は尊敬するほど素晴らしいけれど、こだわりが強すぎて、ついていけないと感じる人と衝突してしまうことがある。だから一つ上の先輩から、パートリーダーの指名がきたのは僕だった。

森の一声で、和志も他の奴らも冷静になったようだった。咳払いをして、姿勢を正す。パート練習の最中だったと、全員が気付いたらしい。

ヒロがまた小さく肩をすくめて、ニヤリと悪ガキのような笑みを向けてくる。ついでに森にも睨まれて、僕は慌てて練習を再開した。

テンポを意識しつつキーボードを弾きながら、僕は内心舌を巻く思いだった。

新って、なんかいいことあると、テンポ早くなるよね。

ヒロはノリが軽いけど、人をよく見ている。あとで根掘り葉掘り聞かれた時にどう答えようか、僕は真剣に考え込んでしまった。

二 二人の問題

昨日、図書館棟脇の花壇の前に座りこんで、杉原さんと話し合った。

「悪夢」のこと、異世界のこと。話すべきことはたくさんあった。僕は自分に起こったことを、できるだけ全て話した。どうやって「悪夢」に会って、取り憑かれたのか。どれだけあいつに悩まされたかとか、眠れない夜を妹に助けてもらったとか、あまり情けなくなるようなことは言えなかったけど。

「……新くんには、道ができたんだね」

僕の話全部聞いた後、杉原さんはじっと考え込むように、ゆっくりしゃべり始めた。

「道？」

そういえば、「悪夢」も同じ言い方をしていた。体操座りで抱えた膝頭を見つめながら、杉原さんは頷く。

「『あちら』ではそういう言い方をするの。『悪夢』が人から人へ渡り歩くことを」

「……『悪夢』が杉原さんから僕に伝染った、ってこと？」

図書館棟脇の花壇は、校庭からも渡り廊下からも見えないところにある。何の花も植わっておらず、忘れ去られたように乾いた土が盛られているだけだ。誰もいないから気兼ねなく話ができるけど、「悪夢」のいない日常の中で異世界のことを話すのは、ひどく不思議な感じがした。

「うん。『悪夢』は心から心へ渡り歩くって言われているから。：

…心に掛っている人へ、道がしやすい」

「」

反応に迷って、言葉に詰まった。僕が「心に掛る人」なのだと、喜んでいいところなのだろうか。杉原さんは淡々としていて、こっ

ちを見さえしないから、わからなかった。

「新くん、剣をもっていたでしょう。たぶんあれが、道ができたしるしだと思う」

「……しるし、って？」

杉原さんはちよつと笑った。その口元だけの笑みで、僕の疑問がすぐく初歩的なことなのだとわかった。

「『悪夢』に憑かれた人をどう見分けれると思う？彼らは必ず足跡を残す。それが、しるし」

杉原さんの話が、よくわからないところまで伸びてきた。ぐるぐる頭をめぐる混乱を、僕はなんとか飲み下した。不思議で、わけがわからないと感じても、そういうものだと思えり納得するしかない。「あちら」へ渡った杉原さんには、異世界の常識がわかっている。僕にはそれがないのだから。

「だからあの剣は、『悪夢』と似たようなもの。……『あちら』での私みたいなものなんじゃないかな」

「つまり、実物じゃない？」

説明をどうにか飲み込もうとしている僕に、杉原さんは静かに頷いた。でも、僕には全くピンとこなかった。

あの時、手に吸いついて離れなかった剣は、ずっしりと重くて冷たくて、確かに存在していた。すぐに、幻のように消えてしまったけど、あの剣は本物だと思う。きつと人に向かって振るえば、ざっくりと皮膚を切り裂いて、血が出るのだろう。

剣の感触を思い出して、僕はじつと両手を見つめた。

「きつとあの剣は、新くんの心に関わるものね」

ふと気づくと杉原さんも、僕の手を見つめていた。

「私は『あちら』で、自分の意思で姿を変えられた、って言ったよね？ 新くんの場合は、そういう意思が剣に働くと思うんだけど」
今も、剣を出せる？と杉原さんはこともなげに聞いてきた。

当然のように言われても、できるはずがない。途方にくれて、僕は呆然と杉原さんを見つめ返した。

あの剣は気付いたら手の中にあつて、気づいたら消えていたんだ。どこからきたのかも、どこに消えたかもわからない。そんなものを、ひよいと出すことなんて無理だ。

「……ごめん、できない」

僕は力なく首を振った。けれど杉原さんは真剣な表情のまま、「いや、たぶんできるよ」と言った。

「しるしは『悪夢』が消えても、なくならない。何か、きつかけみたいなのを思い出して」

「きつかけ、って言われても……」

思わず目が泳いだ。頬をかく僕を、杉原さんがじつと見る。

「きつかけさえ掴めば、今でも出せるはずだよ。あれはきつと、新くんがコントロールできるものなんだ」

杉原さんのまっすぐな瞳は、そうと信じて疑っていないようだった。それに圧されるように、僕はぐっと固く目をつむった。やけくそになって心の中で、剣を出てこいと何度も唱えた。

本当は、あの剣が出てきたきつかけを、考えなくなかったのだ。

杉原さんには言えなかったけど、きつかけなら僕はちゃんと覚えていた。忘れられないくらい、強烈な感情だったから。

杉原さんに対する怒り、憎しみ。「悪夢」の色をした剣は、そういうドロドロした暗い感情から生まれた。真つ黒な炎のようなあの衝動を、僕はまだ覚えている。それ自体はもう遠いけれど、杉原さんを傷つけてやりたいと確かに思ったのだと、その記憶が煤のように腹の底に残っていた。

思い出すたびに、後ろめたさと自己嫌悪で胸が悪くなるような思いがする。好きなのに、どうしてあんなことを思っただらう。

今はもう、傷つけたいだなんて思っていない。むしろ逆なんだ。

「あ」

杉原さんの驚いた声がして、僕は目を開けた。握りしめた手の中に、銀色の剣があった。

「うわ！」

意識した途端、手に重みがかかる。慌てて左手で支えて、ぽかんとその重たい剣を見つめた。

この間と、同じ剣だった。色が変わっても、形はかわらない。平べったくて幅の広い、鈍器のような剣だ。でもあの淀んだ色よりは、おぞましさがいくらか薄れていた。磨かれた刃が光を弾いて、僕は眩しくて目を細めた。

まじまじと見つめていたから、前は気づかなかったことに気づいた。

「これ……」

柄にはまった玉も、色が変わっていた。恐る恐る、指先でそれを撫でる。

この前は何の光も通さない、真っ黒な玉だったけど、今は違う。酸化した銀のようにくすんだ、けれどそれよりも複雑に渦巻く色。

「悪夢」の色だ。

剣がまとっていた「悪夢」を、この玉が吸い取って封じこめたかのようだ。指先から伝わる冷たさに、背筋が寒くなった。

この色はダメだ。見つめていると、ぐらりと視界が揺らぐ。魚の、ぱっくり割れた口。尾ひれに取り巻かれた息苦しさを、思い出してしまう。

「すごい！ やっぱり出せた」

杉原さんの弾んだ声に、はっと我に返った。

杉原さんは微笑んで、輝く剣先を見つめていた。嬉しそうに頬が赤らんでいる。そうっと優しく、指の腹で剣に触れた。

「……なんだか、懐かしい感じがする。やっぱりこれは、『あちらのものだね』」

いとおしむような穏やかな杉原さんの横顔を、僕は呆然と見つめた。

杉原さんは剣を見ても、触れても、恐ろしさなんて全く感じていないようだった。「悪夢」の色をした玉にも動揺しない。杉原さんにとってこの剣は、懐かしい　好ましいものなんだ。

得体の知れない、違和感のようなものを感じた。僕と杉原さんの、認識の差。一目で血や痛みを連想させるような剣を、好ましく、懐かしく思うなんて。理解できないズレに、もやもやした冷たい不安を感じた。

「どうやって出したの？何を考えて？」

こんなに笑顔な杉原さんを、久々に見る気がする。僕は今感じた違和感に気をとられていたから、大して考えずに答えた。

「何って、杉原さんのことを。僕が考えることなんかそれ以外ないよ……」

杉原さんがぴたりと止まった。笑顔も固まって、頬がさらに赤くなった。

え？とその反応にあっけにとられて、その瞬間に気づいた。一気に心臓が跳ねて、かあつと頬が熱くなる。

今、僕は何て言った？顔から火が出るって、こういうことを言うんだろう。恥ずかしい！

「まあ、とにかく！たぶんこの剣は、杉原さんがきっかけになって出てきたと思う。コントロールできるかは、知らないけど」

「そ、そう……」

杉原さんは赤くなりながらも、ちょっと困った顔をしていた。その表情で、ふと僕は恥ずかしさが少し冷めた。

僕がこういうことを言えば、杉原さんは困ってしまうんだ。改めてそう気づかされる。「悪夢」が去っても、僕がふられた事実はなくならない。……あきらめないと、決めなければりだけど。

ちよつとしたことにこうして距離を感じては、予想以上にへこんでしまう自分を何とかしたい。杉原さんのこと、わかりたいと本当に思っているのに、少しつまずいただけでへこむなんて馬鹿みたいだ。もつとどつしり構えた男になりたい。

杉原さんを、困らせたいわけじゃないんだけど。

「『悪夢』がまた出るのか、どうなのかわからないけど」

僕は剣をぐつと握り締めて、杉原さんを見つめた。

「僕はもう、関わりがあるから。杉原さんだけの問題じゃ、ないよ」杉原さんははつとしたように、僅かに目を見開いた。何か言いたそうに唇の端を震わせたけれど、ついには目を閉じて頷いた。

「関係ない」という言葉がどれだけ容赦ない力で人を叩くのか、僕も杉原さんも、ついこの間思い知ったのだ。だからこそ杉原さんに宣言したかった。僕にはもう、「関係がある」ことなのだ。

僕は剣を額の上に掲げて、刃を空へ向けた。空には秋の、刷毛で薄くはいたような雲が溶けている。その淡い空色が、銀に映った。

誓いなんてどうやるか、全然知らないけど。

「僕も、力になりたいんだ」

それができるのは、僕だけなのだ。

三 声

午後最初に受ける数学の授業は、途方もなく眠い。満腹状態で、窓から気持ちの良い日差しがさしこみ、おまけに教科書が何を言っているかわからないとなればなおさらだ。僕はあくびをこらえながら、先生が黒板にさらさらと書いていく数式をぼんやり見つめた。

「で、この関数 $f(x)$ の積分は……」

数学の藤木先生の声は、ぼそぼそともっていて聞き取りづらい。こちらを振り向きもせず、ただひたすら黒板と向かい合っているのだ。僕らに教えているというよりは独り言に近かった。

襲う眠気に負けて何人もの頭が沈んでいるのが、僕の席からはよく見えた。前の席の吉岡も、早々に撃沈している。僕だって、やっとのところで踏みとどまっているのだ。いつ睡眠学習者の仲間入りをしても、おかしくない。

眠気を飛ばすために、軽く頭を振った。すぐにふわふわと遠のきそうになる思考を、何とか手繰り寄せる。

呪文のようにわけがわからない数式は、もう無視して、何か別のことを考えることにした。そうすれば、眠くなくなるはずだ。

別の考えることといえば、僕には1つしかなかった。 剣のこ
とだ。

「悪夢」のいない今でも剣が出せるのだと知って、僕はあれから家で、いろいろと検証してみた。そうして少しだけ、感覚が掴めたような気がする。

頭の中に、スイッチがあるようなイメージだ。辛抱強くそれを押して、剣を握った時の感触を思い浮かべる。あとは強く、念じるのみだ。

何度かやってみただけ、目を閉じてやるとやりやすいような気が

する。イメージに集中しやすいからだ。長い時間ひたすら何かを念じるのは、結構疲れることなのだと、僕はこの頃知った。目を閉じれば、集中する分その時間が短くてすむ。

スイッチになっているのは、もちろん、杉原さんのことだ。

思い出とか、感触とか、具体的な何かを思い出すわけじゃないけど、彼女のことを考える。その瞬間は、甘さも苦さもないまぜになったような、不思議な気分になった。

僕は杉原さんのことがもちろん好きだけど、彼女によって喚起される感情は、もう純粹に「好き」というだけじゃないのだろう。そう、気づかされた。もつと色づいていて、生々しくて、ちらりと裏返して見れば、黒くて嫌なものも確かにある。そんな「好き」なんだ。

だからスイッチを押す時は、慎重になる。痛む歯を舌先で探るみたいに、そつと、時間をかける。自分の生々しい感情と向き合うのは、僕にとっては結構、怖いことだった。

「……………」

初め、僕はその声に気づかなかった。

聞き取りづらい藤木先生の声にまぎれて、プツプツとラジオのノイズのような音がした。割と近くから聞こえたけれど、誰かの携帯のバイブか何かだろうと思って、大して気にも留めなかった。

でもその音は、なかなか止まなかった。いや、ふっと途切れたり、また聞こえたりと、明らかに携帯の音とは様子が違っていた。そしてどうやら、人の声のようだった。

不審に思っ、僕は周りを見回した。僕の席の周りには、机に突っ伏して完全に寝ている奴と、うとうと舟を漕いでいる奴、かろうじて授業にしがみついている奴ばかりだ。テレビをつけたり、ラジ

才を聞いていたりするような奴なんて、どこにもいない。

声の発生源を追って、ふと僕は手元に目を落とした。そして、思わず叫びそうになった。

「！」

のけぞった拍子に、ガタンと椅子が大きな音をたてた。

教壇に立つ先生が、怪訝そうな顔で振り返る。うとうと夢の世界に片足を突っ込んでいた連中も、ぎよつとした顔で僕を見た。

「何だ嶋本、どうした」

藤木先生が、平坦な声で聞いた。

「いや……何でもないです」

早口で答えて、僕はさっと足を組んだ。背中を丸めて、腕でかばうようにしながら、右手を隠す。

なぜか、僕は剣を握っていた。

ぼーっと考えていたら、うつかり頭の中のスイッチを押してしまったようだ。まさか授業中に、こんなものを出してしまうなんて。信じられない思いで、一気に冷や汗が出た。

この剣は、他の人にも見えてしまうものなんだろうか。ひよつとして、見つかったら銃刀法だとか、危険物所持だとかの罪に問われてしまうんじゃないだろうか。

焦ってしまって、上手い切り抜けかたがわからない。机に突っ伏すくらい身を低くして、僕は引きつった笑いを浮かべた。

笑って誤魔化せないだろうか。

「……腹でも痛いのか？」

藤木先生は不審そうに眉をひそめた。

「ええ、まあ……ちよつと」

僕は曖昧に濁した。腹を押さえているような格好だから、腹痛を起こしているように見えるのだろう。そういうことにして誤魔化してもいいのだけど、「じゃあ保健室に行け」と言われたら、一番困

る。こんなものを持っていたら、立ち上がれない。

頭の中で毒づきながら、早く消えろと何度も念じた。藤木先生は、じいっと問うような視線で見つめてくる。足に挟んで隠している剣を見咎められるのが怖くて、僕はその視線を、息をつめて受け止めた。

けれど先生はすぐに、すつと興味を失ったように目をそらした。

「……授業中は、静かにするように」

ぼそつと、なおざりな注意をされる。恥ずかしくて頬が熱くなつたけど、僕はほっとした。どうやら、見つからずにすんだようだ。

再び先生が黒板に向き直ったのを確かめて、僕はそつと手元を見下ろした。あの厄介な剣は、もうなかった。

深いため息をついて、こっそり汗をぬぐう。ひとまずこの場は乗り切ることができた。でも、気がかりなことが残っていた。

かすかに聞こえた、あの声。あれは確かに、剣から聞こえていた。一体、何の声だったんだろう。

四 霧とそして

授業を終わらせるチャイムが鳴ると、藤木先生は背中を丸め、誰よりも早く教室を出て行った。

息を吹き返したように、教室内が騒がしくなる。居眠りしていた連中も、チャイムと同時に目を覚まして、嘘のように元気になっていた。

次の授業は移動の必要がない世界史なので、教室内は休み時間の割に人が多くて、動きづらかった。でもそれをかきわけて、僕は杉原さんのところへ向かった。休み時間は短いけれど、どうしても、さつき起きたことを相談したかった。

杉原さんの席の隣には北沢が座って、2人で楽しそうに喋っていた。この2人は結構、仲が良いようだ。邪魔するのは気が引けたけど、僕は声をかけた。

「あの、杉原さん。ちょっといいかな」

驚いた顔が2つ、僕を見上げた。

「新くん？どうしたの？」

「うん、ごめん。ちょっと話したいことがあるんだけど……」

ここじゃ言えない、という含みをもたせて、言葉を濁した。異世界のことなんだと、必死で目で訴える。……通じるかどうか、かなりあやしかったけど。

でも何か勘付いてくれたのか、杉原さんは頷いて席を立った。

「わかった、行こうか。このみ、ちょっとごめんね」

「う、うん」

北沢はぼかんとした顔で、僕と杉原さんを交互に見た。

「……あの、2人ってさ、聞いていいのかわからないけど」

眼鏡を押し上げて、北沢は慎重な口ぶりで言った。

「結局、その……どうなってるの？」

僕と杉原さんは一瞬視線を交わらせて、同時に曖昧な笑みを浮かべた。

この質問には、僕は答えられない。沈黙を守る僕に代わって、杉原さんは困ったように首を傾げながら言った。

「うーん……。でも、まあ、仲良しだよ」

なんだか、不思議な誤魔化しかただった。

困惑気味な北沢の視線に背を向けて、僕たちは教室を出た。

僕と杉原さんの関係は、結局、どうなっているのか。

部活の連中に続いて、北沢からも聞かれてしまった。でもそんなこと、僕自身が一番知りたい。

もう付き合っていないことは確かだ。でも僕と杉原さんの繋がりは、以前よりも深くなったように思う。秘密を共有して、付き合っていた時よりももっと、特別な関係になった。ちょうど今、視線で通じあったように。

だから僕は、まだ望みがあると思うことができるのだ。

人の来ない場所を求めて、屋上へ続く階段を上る。もちろん屋上に出る扉には鍵がかかっていて入れないけど、その扉の前のスペースがちょうど、2人並んで座るのにいい具合なのだ。密談にはもってこいだった。

休み時間は少ない。階段に腰をおろして、僕はすぐに切り出した。

「さっき気づいたんだけど、あの剣から、声が聞こえるんだ」

「声？」

杉原さんはぴくりと眉をひそめた。

「どんな声？何を言っていたの？」

心配げな早口で、杉原さんは尋ねる。僕は目を閉じて、首を振った。

「わからない。すごく小さな声だったから」

剣を呼び出す手順を、頭の中で踏んでいく。急がないといけないけど、焦ると空回りして失敗しそうだ。だからなるべく落ち着いてスイッチを押すイメージをした。

握った手に重みを感じて、僕は目を開けた。「学校」という日常には全然似つかわしくない、銀の剣がそこにあった。

「すごい。もう完璧にコントロールできるんだね」

杉原さんが感心したように言っただけで、僕は力なく首を振った。「まさか。全然だよ」

さっきの授業でも、剣を出そうと思って出したわけじゃない。うっかり出てしまっただけだ。

不用意にこれ进行い浮かべていた僕が悪いのかもしれないけど、場所もわきまえず出てこられて、本当に迷惑だった。コントロールなんて、冗談でもできる気がしない。

柄にはめこまれた「悪夢」色の玉に、慎重に触る。

「まさかと思うんだけど、あの声はもしかしたら、『悪夢』のものなんじゃないかな……」

さっきからずっと、その可能性について考えていた。魚の姿をしたあの『悪夢』は、消えたのではなくて、本当は隠れているだけじゃないのか？ 例えば、この剣の中に。そして、また出てこようとしているんじゃないか。

だとしたらこんなもの、早く捨てなければならぬ。

そう思っ唇を噛んだ時、また、声が聞こえた。

「……………」

ノイズ混じりの、小さな声だ。やっぱり不明瞭で何と言っているのか聞き取れないけど、人の声だと、はつきりわかった。

「この声だよ。どう思っ？あの『悪夢』と、何か関係あるんじゃないかな」

僕は杉原さんの方を振り向いた。

そしてぎょっとした。

杉原さんは凍りついたような表情で、剣を凝視していた。

今にも倒れそうなほど、顔色が真っ青だ。指先が白くなるくらい強く、ぎゅっと拳を握っている。

こんなにも緊張して、鬼気迫る様子の杉原さんを、僕は見たことがなかった。

「どうしたの？だい」

大丈夫？と僕は尋ねようとした。でもその言葉は、杉原さんにぶつかられた勢いで、喉の奥に消えた。

体当たりするような勢いで、杉原さんが剣に掴みかかったのだ。僕の手から剣を奪おうとでもするような強さだった。突然の衝撃に危うく壁に頭をぶつけそうになる。とっさに左手をついて、体を支えた。

ひどく驚いて、僕は杉原さんを見つめた。

杉原さんは僕の右手ごと、剣を抱きかかえるようにして持っていた。泣きだしそうに表情を歪めて、「悪夢」の色をした玉に、震える指先で触れる。

こんなに大切なものはないというような、想いのこもった手つきだった。

「ヒトイ」

そっと、杉原さんがささやいた。

どうしたんだ、と僕は尋ねようとしたけど、その機会はまた失われた。

玉から、濁った色の靄が噴き出す。

その突風をまともに目に受けてしまって、僕は慌てて顔を背けた。いくらかその靄を吸いこんでしまって、咳きこむ。

濁った、暗い極彩色。忘れもしない、「悪夢」のまもっていた色

だ。吸いこんではいけないものなんじゃないかと、すぐに不安になった。

「何だこれ。大丈夫だった、杉原さん」

咳きこみながら、僕はやっと目を開けて、杉原さんを見た。

杉原さんは、泣いていた。そして微笑んでいた。

靄はドライアイスのように足元に漂っていて、玉からもゆっくりとだけど、淀みなく湧き続けていた。でも剣を抱えている杉原さんには、全く何の影響もないようだった。「悪夢」色の煙なんかには目もくれず、彼女は一心にある一点を見上げていた。

その視線を追って、僕も杉原さんの正面にいるものを見た。

「……女？」

妙な格好をした女の人が、階段から数センチ浮いて、立っていた。

けれど、杉原さんを見つめ合うその人が女性ではないことに、僕はすぐに気づいた。

長めの明るい金髪を後ろでゆるく束ねていたから、女の人に見えるのだ。おまけに顔だけで判断しようとしたら、きれいな女性にしか見えなかった。でも首の太さと、体つきで、そいつが男であるとわかった。

呆然とする僕の前で、杉原さんは再びささやいた。

「……ヒトイ」

泣いているのに、声も表情も喜びに満ちていた。杉原さんはずがるように、その男に向かって手を伸ばした。

それに答えるように、靄をまとった彼も微笑んだ。そしてそつと、2人は手を重ねた。

「……ヨウ」

低い声はあまりに優しくかったので、僕には全てが、まざまざとわ

かった。

誤魔化しようもなく、目をそらすこともできなかった。

この世に2人しか存在しないように微笑み合う恋人たちを、僕はただ見ていた。

この場の邪魔者は、明らかに僕だ。

やっとわかった。僕は杉原さんにとって特別じゃない。秘密を共有しているのだと、彼女の力になれるのは僕だけなのだと浮かれていたけど、僕は、部外者だ。

すうつと冷えていくような虚脱感に、吐き気さえした。

目の前の男は、「あちら」の　杉原さんの「好きな奴」に、間違いなかった。

？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7617m/>

夢の盾 現の剣

2011年2月1日00時40分発行